

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1982年度

1983年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1982年度

1983年3月

豊中市教育委員会

序 文

古来、豊中市域は緑なす千里丘陵と、淀川、猪名川によって育まれた沃野にあり、恵まれた自然と生活の地として栄えて参りました。ところが、近年の著しい開発の波は、豊かな自然を住宅とマンションの建ち並ぶベッドタウンへとその姿を変えました。

現代に生きる私達の大地には、数多くの古代遺跡が眠り続ける一方で、日々の土木建築工事に伴って、これら先人の文化遺産が危機に直面しております。

この報告書は、昭和57年度事業として園並びに大阪府の補助を受けて、豊中市教育委員会が実施した、市内遺跡の山ノ上遺跡・大塚古墳・新免遺跡の調査に關するものです。

各遺跡の調査成果については、以下に報告しているとおりですが、とくに、大塚古墳、山ノ上遺跡においては、きわめて重要な資料の発見と、すぐれた成果を見いだすことができたものと信じております。

なお、調査の実施にあたっては、多くのご指導をいただいた諸先生をはじめ、事業者、土地所有者の方々には文化財の重要性をご理解いただき、積極的にご協力いただきました。また、文化庁、大阪府教育委員会並びに関係機関には、格別のご指導とご協力をいただきました。こうした関係各位からのご協力に支えられて文化財保護行政が進んできたことに対し、関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

昭和58年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 湯元 英世

例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が昭和57年度国庫補助事業（総額 3,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、新免遺跡、山ノ上遺跡、大塚古墳の3遺跡について、橋本正幸が山ノ上遺跡、柳本照男が新免遺跡、大塚古墳を担当し、昭和57年7月21日から昭和58年3月31日までの間、発掘調査及び整理作業を実施した。
3. 本書の執筆は下記の者が分担して行なった。

山ノ上遺跡	I ~ IV	橋本正幸
出土土器観察表		厚美正子
大塚古墳	I ~ IIIの1, 2, IV	柳本照男
	IIIの3の1)	服部聰志
	IIIの3の2)	伊藤雅文
	IIIの3の3)	田上雅則
新免遺跡	I	柳本照男
	II ~ III	山元 建

遺物写真は岡田克也が行ない、編集は橋本正幸、柳本照男がそれぞれ担当した。大塚古墳においては藤田和尊の協力を得た。

4. 発掘調査の進行にあたって、山ノ上遺跡では、豊中市文化財保護委員・藤沢一夫氏より御指導、御助言をいただいた。また土地所有者の渡辺 桂氏には多大な御協力をいたいた事に対し感謝いたします。

大塚古墳では、豊中市文化財保護委員・鳥越憲三郎氏をはじめ、多くの方々より御助言をいただいた。特に網干善教氏並びに関西大学考古学研究室の諸氏には一方ならぬ御世話をなった。記して感謝いたします。

山ノ上遺跡（寺院跡）

本 文 目 次

I 調査の経緯	1
II 地理的環境と周辺遺跡	2
III 調査方法と経過	3
IV 調査の概要	
1 層序	5
2 検出遺構	6
V 出土遺物	10
VI 妥約	18

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	1
第2図 試掘調査時の近景	4
第3図 調査区の遺構全体図	5
第4図 基本層序断面実測図	6
第5図 溝状遺構 S D-01、02実測図	7
第6図 溝状遺構 S D-03実測図	8
第7図 石積状古墓 S X-01実測図	8

第8図 井戸状遺構S E -01実測図	9
第9図 掘立柱建物跡 S B -01実測図	9
第10図 包含層内出土土器実測図	10
第11図 溝状遺構03、井戸状遺構、石積状古墓出土土器拓影実測図	13
第12図 溝状遺構02、03出土瓦拓影実測図	15
第13図 捺印瓦拓影実測図	16
第14図 溝状遺構03出土瓦拓影実測図	17

図 版 目 次

図版1 山ノ上遺跡（寺院跡）

- 1 調査区域の全景（北より）
- 2 溝状遺構02全景（東より）

図版2 山ノ上遺跡（寺院跡）

- 1 溝状遺構03全景（北東より）
- 2 石積状古墓01全景（南より）

図版3 山ノ上遺跡（寺院跡）

- 1 井戸状遺構01全景（北より）
- 2 掘立柱建物跡01全景（北より）

図版4 山ノ上遺跡（寺院跡）

- 1 溝状遺構03五輪塔捺印瓦出土状態
- 2 溝状遺構03三巴文軒丸瓦出土状態

図版5 山ノ上遺跡（寺院跡）須恵器・土師器・弥生土器・瓦器

図版6 山ノ上遺跡（寺院跡）鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦

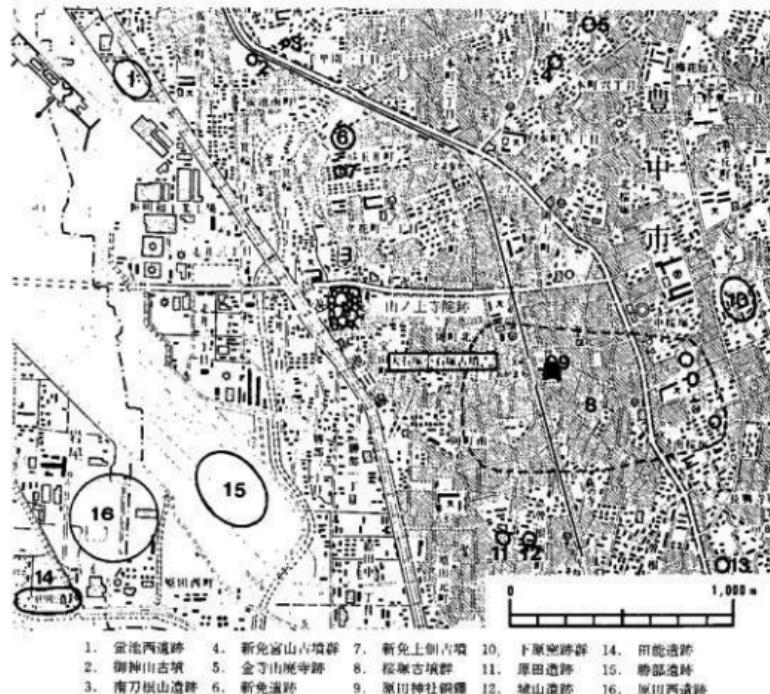
図版7 山ノ上遺跡（寺院跡）軒丸瓦・軒平瓦

図版8 山ノ上遺跡（寺院跡）捺印瓦・丸瓦・平瓦

I. 調査の経緯

豊中市教育委員会は、近年宅地開発に伴う事業の一環として、遺跡の存在を明確にするため遺跡分布調査を実施してきた。今回、豊中市山ノ上町37-1番地において宅地造成が計画されることになり、洪積台地上における遺跡の確認と周辺遺跡との関連性も考慮されるため、共同住宅建設工事に先立って試掘調査を実施した。

試掘調査期間は、昭和57年7月30日から8月16日までとした。調査の目的は、遺跡の在否と文化層の遺存状況の把握である。共同住宅建設予定地内の対象面積132m²に3ヶ所のトレーニングを設定した。試掘調査の結果、飛鳥時代から鎌倉時代以降にかけての文化層が広範囲の地域に及んでいることが判明した。豊中市教育委員会は、試掘調査の経過を踏まえて工事主体者と協議の結果、共同住宅建設地域500m²を対象に継続調査を実施した。調査期間は、昭和57年10月6日までとした。



第1図 周辺遺跡分布図

II. 地理的環境と周辺遺跡

山ノ上遺跡は、豊中市山ノ上町に所在する。豊中洪積台地が曾根から螢池にかけて舌状に発達する旧猪名川左岸の河岸段丘端に立地し、標高17m前後で河岸段丘面から沖積低地面までの比高差は6mを測る。

周辺の丘陵や沖積地上に立地する遺跡は、近年都市化の波と共に宅地開発に伴う発掘調査の実施などにより、その存在が明確になりつつある。

豊中洪積台地や猪名川沖積低地上にかけて、旧石器時代後期から中世に至る遺跡が多数点在する。洪積台地上に立地する周辺の遺跡では、新免遺跡が最近の発掘調査で弥生時代中期から古墳時代中期にかけての複合遺跡であることが判明し、原田神社境内から単独で出土した弥生時代中期の外縁付鉢式流文水銅鐸などは著名である。古墳時代には、前期から後期に至るまで多数の古墳が造営され、古墳群を形成している。前期古墳としては、刀根山丘陵の縁辺部に前方後円墳が所在する。中期古墳では、周知の古墳として猪名川流域最大規模を有する桜塚古墳群^{註1}があり、円墳、前方後円墳、方墳による36基で構成されている。後期古墳は、桜井谷丘陵に造営されている宮山古墳群、横穴式石室に陶棺を有する太鼓塚古墳群が30基前後で構成している。また、桜井谷丘陵は、古墳時代中期から奈良時代にかけての須恵器生産を行なった桜井谷古窯跡群も分布する地域である。飛鳥・白鳳時代以降になると古代寺院が創建され、法隆寺式伽藍配置の金守山廃寺などが豊中洪積台地に立地している。

豊中洪積台地から展開する猪名川流域の沖積低地では、繩文時代晩期から中世にかけての複合遺跡が多数分布する。弥生時代の墓制で注目された山能遺跡^{註2}、勝部遺跡^{註3}などが弥生時代前期から始まる。弥生時代後期以降になると遺跡数は急激に増加し、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落遺跡である利倉遺跡^{註4}、稲積遺跡などが好資料を提供している。奈良時代以後になると豊島地方は、藤原氏の私領となり寺領莊園が形成されてゆく。

註1. 猪名川低位段丘面において、単独で国府文化期の石器が若干採集されているに過ぎない。低位段丘面の発掘調査によっては、プライマリーな状態で旧石器群が検出される可能性がもたれる。

註2. 藤沢一夫 「古代の豊中」（豊中市史第1巻 1961年）

註3. 「山能遺跡発掘調査報告書」（尼崎市教育委員会 1982年）

註4. 「勝部遺跡」（豊中市教育委員会 1982年）

註5. 「利倉遺跡」（利倉遺跡発掘調査団 1976年）

III. 調査方法と経過

調査方法は、伊丹・豊中線南側沿いに磁北で 5×5 mのグリッドを調査地域に設定した。北東のポイントを基準点とし東西ラインの北から南にかけてアラビア数字で示し、南北ラインの東から西にかけてアルファベットで表示した。

表土層から第3層上面までは、重機掘削で除去作業を行ない第3層下の文化層より人員力による調査方法である。

調査日誌抄

試掘調査（昭和57年7月29日～8月16日）

- 7月29日 本日より、山ノ上寺院跡試掘調査開始する。
30日 調査面積132m²内の3ヶ所にトレーニング設定。重機掘削で表土層削除。
31日 重機掘削完了。第2層面から人員力で削除。堆積層より、近世遺物出土。
8月1日 第2層面で、近世の小溝、Pit検出。
8月2～5日 第2層の削除作業。若干の近世遺物出土。
6～9日 第3層上面の精査行なう。
10日 第3層上面で、溝状遺構、土塗、Pitに伴って若干の土器、瓦類出土。
11日 検出遺構は、中世寺院遺構に伴う遺構であることが判明する。
12日 検出遺構の清掃を行ない写真撮影後、平面・断面実測図作成。
13日 寺院関連の遺構を除外したトレーニング内第3層削除する。第3層の堆積土は、各時代の遺物が混在する整地層であることを確認した。
14日 第4層上面で、飛鳥時代と考えられる根立柱建物跡の柱穴、Pit検出。
15日 検出遺構の清掃を行ない写真撮影後、平面・断面実測図作成。
16日 調査区の平板測量、南北ラインの断面実測図作成。本日で、試掘調査完了。

第1次調査（昭和57年8月24日～10月6日）

- 8月24日 工事主体者と協議の結果、本日から500m²の本調査を実施する。
25～26日 重機掘削で、調査地域内第1～2層まで除去作業を行なう。
28日 調査区域 5×5 mのグリッド地区割り設定。
29日 A～C～1～4区第3層上面精査。瓦類を多数含む溝状遺構S D-1、2検出。
30日 昨日検出の溝状遺構内の遺物清掃を行ない写真撮影。
31日 溝状遺構平面・断面実測図作成。B～C～2～3区で石積状遺構検出。

- 9月1～9日 A～C－1～3区において、第3層上面で遺構の切り合う溝状遺構、土塹、Pit検出。遺構内より若干の遺物出土。
- 11日 検出遺構の清掃を行ない写真撮影。検出遺構の実測準備。
- 13～14日 検出遺構の平面・断面実測図作成。
- 16日 A～D－3～5区第4層上面まで削除。第3層内より多数の遺物出土。
- 17日 A～B－3～5区の試掘調査で検出している掘立柱建物跡1軒確認。
- 20日 E－2区で第3層上面より切り込まれた井戸状遺構検出。
- 21日 井戸状遺構内の底面より、瓦器碗、土師皿出土。
- 22日 井戸状遺構、掘立柱建物跡清掃を行ない写真撮影後、平面・断面実測図作成。
- 23～24日 雨天のため内業作業。
- 25日 C～D－1～2区で、第3層上面で柱穴列検出するが残存状態極めて悪い。
- 26日 F～G－0～2区第3層上面まで削除。午後から現地説明会を行なう。
- 27日 昨日同様に第3層上面まで削除。
- 28～30日 F～G－0～2区で、南北方向に走行する溝状遺構と落ち込み検出。
溝状遺構、落ち込み内精査。埋土内より多量の瓦類出土。
- 2日 検出遺構内の遺物清掃を行ない写真撮影後、平面実測の準備。
- 4日 平面・断面実測図作成。
- 5日 検出遺構内の遺物採取。調査区全域の写真撮影。
- 6日 調査区全域の平板測量図・断面図作成。
- 7日 B～C－2～3区で、検出した石積状遺構の補足調査。藤沢一夫先生より、古墓の可能性が考えられるとの御教示を得た。本日で発掘調査完了。機材タ方近くに撤収する。

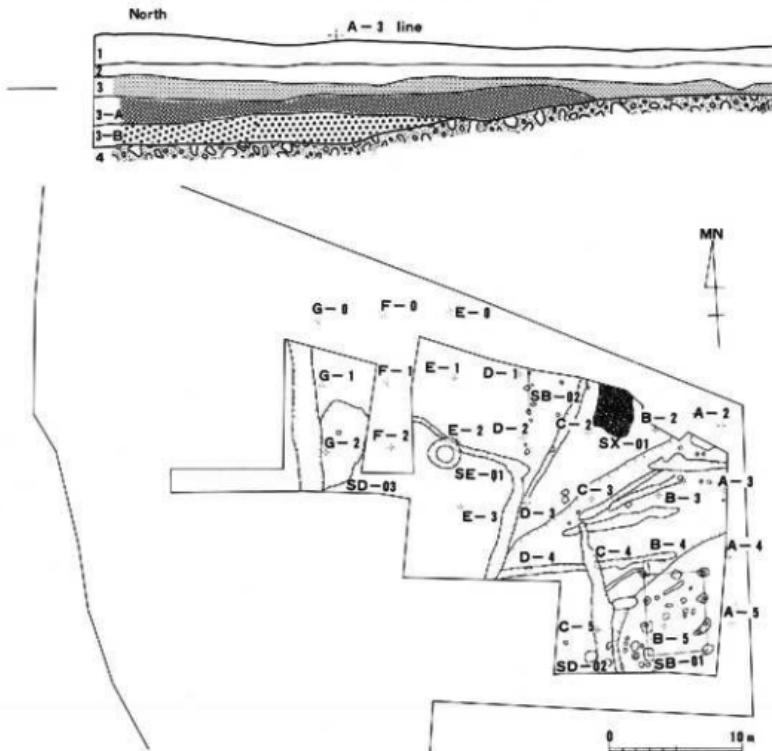


第2図 試掘調査時の近景

IV. 調査の概要

洪積台地上に立地する遺跡は、遺構の遺存状態は良好ではなく後世の2次的な削平や擾乱を受けておりプライマリーな堆積状況で遺存するのは稀である。本寺院跡も現・近世の整地により遺構の遺存状態は著しく損なわれて良好ではなかった。

発掘調査地域において、2時期の重複する希薄な文化層が存在した。重複する遺構面の比高差はほとんどない。上層面の検出遺構は、平安時代末期から室町時代にかけて存続していたと考えられる中世寺院跡関連の遺構群を検出した。中世寺院建立に際して、田地形の発達した谷状傾斜面を人為的な客土や自然流失土による埋土によって整地作業が行なわれて、中世寺院が建立されている。下層面の検出遺構は、飛鳥時代に比定できる掘立柱建物跡に伴う溝、土塁、ピットを検出した。次に上・下層の堆積状況、検出遺構について記述する。



第3図 調査区の遺構全体図

1 層序

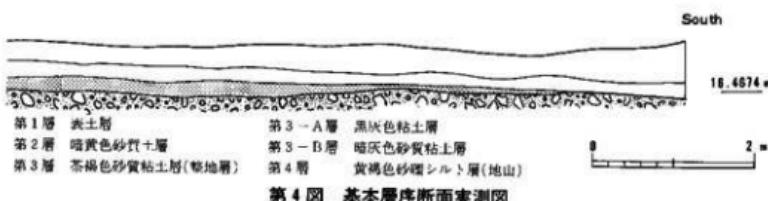
本遺跡の層序は、第4図に示すようにA-2～5地区にかけての南北断面で、4層で構成されている。C-G-0～2地区では、第3層上面で段丘砂礫シルト層で区分される。各地区の層序別の堆積状況は異なり、各層序が後世の人为的による削平や自然流出作用により同一レヴェルで堆積を示さないことが原因の一因だと考えられる。

第1層 表土層

第2層 暗黄色砂質粘土層（中・近世の遺物包含層）

第3層 茶褐色砂質粘土層（弥生時代中期～奈良時代にかけての遺物が混在する整地層）

第4層 黄褐色砂礫シルト層（地山）



2 検出遺構

上層遺構

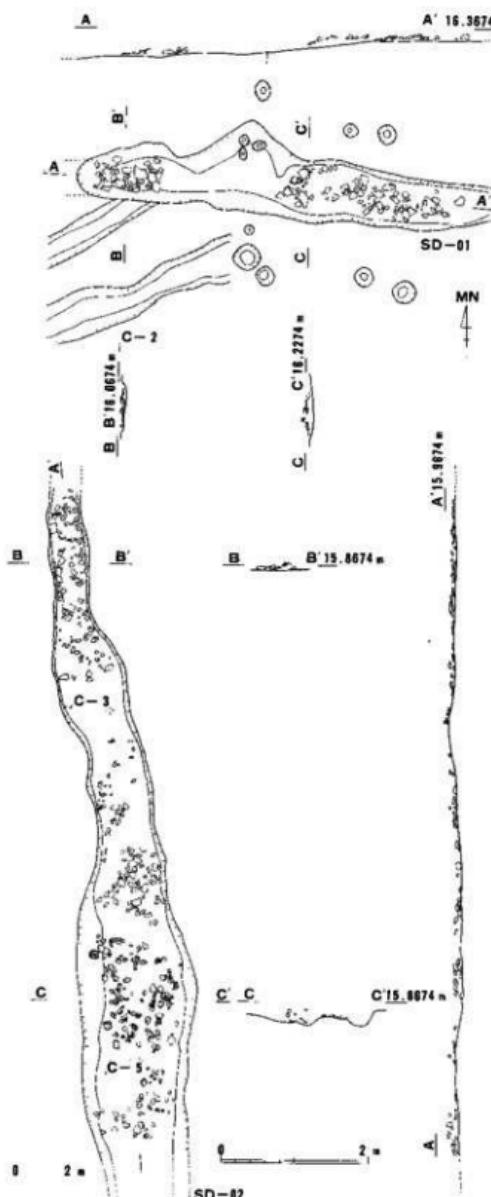
溝状遺構 SD-01, 02

A-D-2～5地区の第3層上面より、新旧関係のある遺構と切り合いを示す二条の溝状遺構を検出した。SD-01・02は、直角に屈折する同一の構造を有する瓦溜の雨落溝である。溝の残存状態は悪く、後世による削平が著しく認められ溝の基底面を残存するのみであった。SD-01は、東西方向に直行する溝で西側は削平により消滅し東に延びる。残存長5.5m、幅0.9m、深さ0.1m前後を測る。SD-02は、南北方向に走行する溝で北端付近にかけて両側は広くなる。残存長9.0m、幅1.5m、深さ0.2m前後を測る。

出土遺物は、溝状遺構の基底面内から多数の瓦類が出土した。時期は、11～13世紀段階に比定できる。

溝状遺構 SD-03

F-G-0～2地区の第3層上面より、検出した瓦溜の雨落溝である。溝の東側は、橢円形を呈する比較的浅い落ち込み状遺構と重複しており、溝が落ち込み状遺構を切断し前後の差

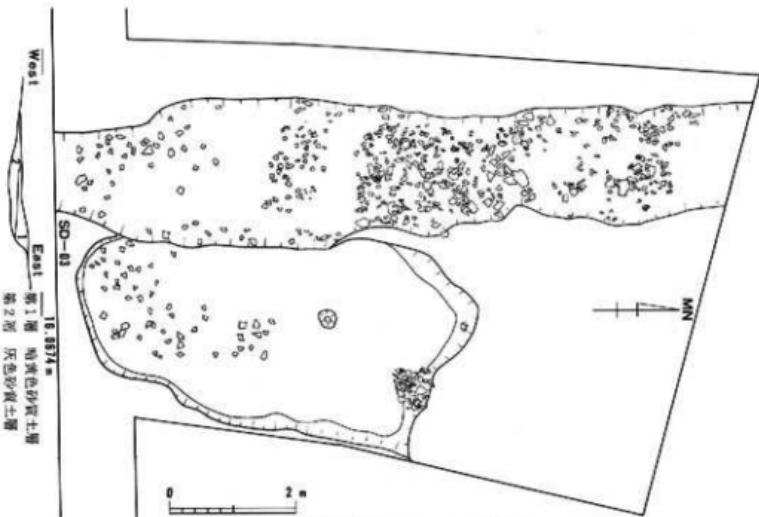


第5図 溝状造構SD-01、02実測図

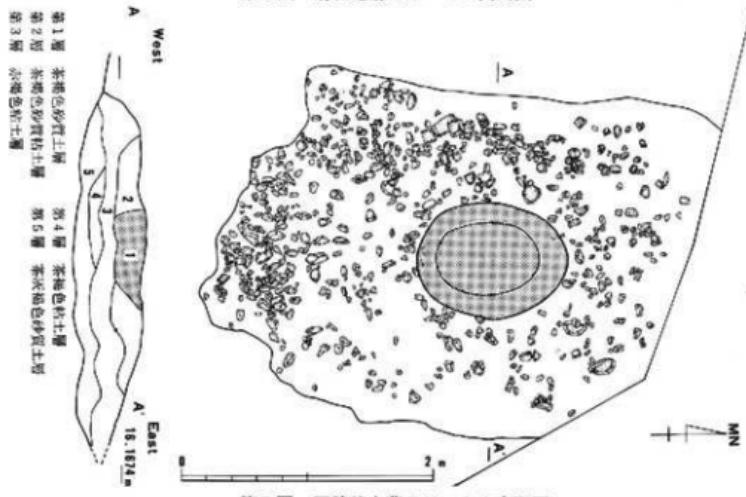
が認められる。南北方向に走行する溝であるが、残存状態は悪くSD-01、02と同様に上層面において溝の大部分は削平され、基底面が残存するのみである。残存長11.0m、幅は1.0m、深さは0.3m前後を測る。出土遺物は、基底面上層から多量の瓦類を出土した。溝の形成時期は、遺物から想定してSD-01、02と併行関係にあると考えられる。

石積状古墓 SX-01

B-1地区の第3層上面より検出した古墓と考えられる石積状遺構である。残存状態は良好ではなく石積のマウンドの大半は削平されて、規模は明確ではない。マウンドの盛土は、上層面において4cm前後の段丘礫と土師質土器、瓦片を混在する。下層は砂礫粘土の互層による盛土で構成されている。マウンドの中央に直径が1.0m、深さが0.3mを測る墓壇と考えられるピットが掘り込まれている。埋土内には藏骨器の底部と思われる土師質土器を含んでいた。遺構は、長方形を呈し残存する長辺4.0m、短辺2.8m、高さ0.5m前後を測る石遺状古墓である。



第6図 溝状造構 SD-03 実測図



第7図 石積状古墓 SX-01 実測図

井戸状造構 SE-01

E-2地区の第3層上面より、上層の溝と切り合う円形状の井戸を一基検出した。直径2.3m、深さ1.0mを測る。井戸の上層には角礫が不規則に集合している。埋土の中層において円形状を

里する井筒の形跡を残している。埋土の下層内から瓦器碗、土師皿類などが一括で出土した。

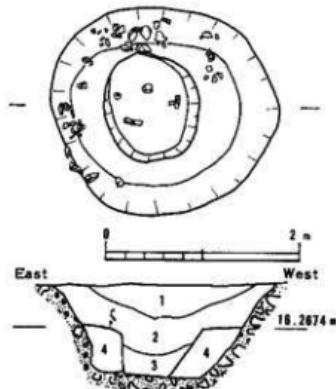
出土遺物からの年代は、瓦器碗編年で13世紀前半に比定できよう。

下層遺構

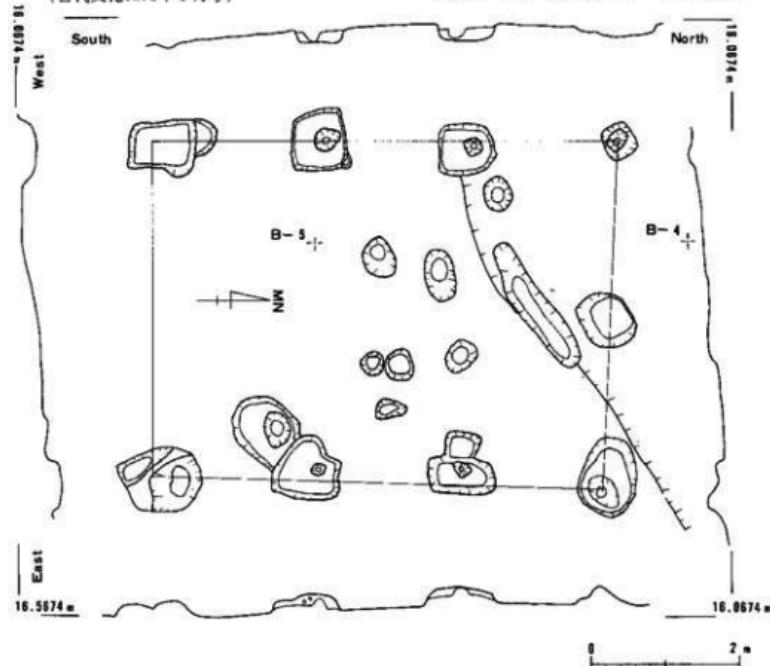
掘立柱建物跡 SB-01

A~B-4.5地区の第4層上面で掘立柱建物跡1棟検出した。柱穴列の主軸は磁北で、3間×1間である。柱間は桁行部3.0m、梁行部2.3mを測る。柱穴の掘り方は0.8mで柱穴の直径0.3m、深さ0.2m前後を測る。掘立柱建物跡の掘り方の埋土から6世紀後半の須恵器が出土している。

註 白石太一郎「瓦器の生産に関する二、三の覚え書」
(古代文化1975年1月号)



第1層 黄灰色粘土層 第3層 暗灰色粘土層
第2層 茶灰色砂質土層 第4層 灰色粘土層
第8図 井戸状造構 SE-01 実測図



第9図 掘立柱建物跡 SB-01 実測図

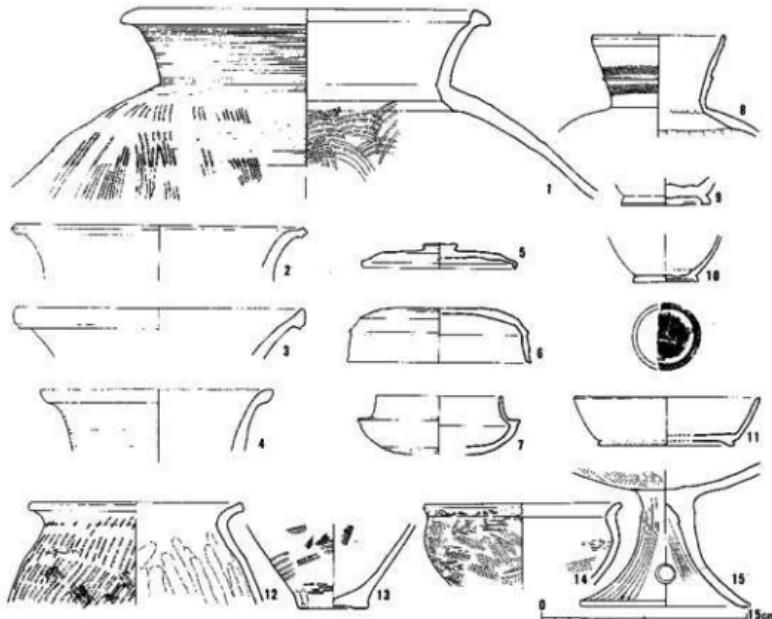
V. 出土遺物

出土遺物の整理は、すべて完了していないので主な遺物を抽出して記述する。

本遺跡の第2・3層においては、弥生時代中期から近世にかけての遺物が出土した。第2層は、古伊万里焼、土師器、寛永通宝などを含む近世遺物層である。第3層は、弥生時代中期から奈良時代までの弥生土器、石器、須恵器、土師器、金属製品などが多数混在する整地土で、これらの遺物の大部分は包含層中の細片である。遺構に伴なう遺物としては、整地層上面で中世寺院遺構に係わる溝状遺構01～03、石積状古墓、井戸状遺構などから土器、瓦類が多数出土した。飛鳥時代の遺構内からは、若干の須恵器、土師器の細片が出土した。

包含層の土器（第10図1～15 図版5）

図示した土器類は、第3層の整地土内より出土した弥生時代後期から奈良時代にかけての器種の異なる須恵器、土師器、弥生土器である。



第10図 包含層内出土土器実測図

観察表 包含属に伴う遺物（第10図1～15）

標識番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	瓶	口径 残存高 27.0 13.8	口頭部は上外方にたちあがり、口縁部は上外方に肥厚する。肩部は下外方にドリ、焼け歪みのため、やや成り立っている。	口頭部の内外面は機ナナ調整。肩部外面は、複数方向平行タッキの上からカキ目調整、内側は円弧タッキを行なっている。	口頭部と肩部の一部に暗緑色の自然釉がかかる。他の部は、内外面は灰白色を呈す。
2	甕	復元口径 残存高 21.6 4.0	口頭部は上外方にのび、口縁部は外方に張り出す。端部は断面三角形を呈し、平坦な2面を有す。	口頭部は回転ナナ調整を行なう。口縁部はシャープに仕上げられている。	焼成は良好で堅緻。胎土は砂粒をやや多く含む。外側は暗灰色、内側は灰白色を呈す。
3	甕	復元口径 残存高 21.2 3.7	口頭部は上外方にのび、口縁部は上下に肥厚し、下邊に1条の凹槽が巡る面を成す。	外面は回転ナナ調整を行なう。内面は釉がかかっているため不明。	胎土は細粒をやや多く含む。外面は灰褐色で一部釉付素、内面は暗緑色の釉がかかる。
4	甕	復元口径 残存高 17.2 4.5	口頭部は上外方にたちあがり、口縁部は外反 ¹ 、肥厚する。	外面の口縁部は、回転ナナ、肩部はカキ目調整を行なっている。	内面は、釉や砂粒等がよく培養している。
5	杯蓋	口径 つまみ径 器高 11.4 2.5 1.8	低くて平底な天井部の中央に扁平なつまみが付く。火舟部から下外方に下った後、口縁部は、下方に下る。	天井部外面にヘラケズリを行なった後、内面中央を除く全面に回転ナナ調整をしている。内面中央は一定方向ナナ調整である。	色調は、断面中央から器表にむかって、暗紫色、黒色、淡灰色を呈する。胎土は精良。
6	杯蓋	口径 器高 13.0 4.2	天井部中央は、ほぼ平底で、口縁部と天井部の境に接縫がある。口縁部は下方に、やや開き気味に広く下る。口縁部内面にわずかに段を有する。	天井部外面に右まわりに幅広く、丁寧なヘラケズリを行なう。口縁部内外面に回転ナナ天井部内面にナナ調整を丁寧に行なう。	色調は淡灰色を呈する。胎土は砂粒をあまり含まず精良。
7	杯身	復元口径 残存高 12.5 4.3	体部は底部から上外方にたちあがり、受盤下は縦縫が巡る。受盤の上面は平坦な面を有する。たちあがりは長く上方にのび端部は丸い。	天井部外周の約弱に右まわりのヘラケズリを行なう。性は内外面とも回転ナナ調整を行わない。器表は平滑に仕上げられている。	砂粒を若干含むが、ほぼ精良である。焼成は良好で堅緻である。
8	甕	復元口径 残存高 9.7 7.4	口頭部は、上外方にたちあがり、中程に断面三角形の凸槽とその下に、各1本1条の波状文が巡る。口縁部は、内面で盛盤がややすくなり、端部は丸い。	肩部内面に、口縁部と胴部の接合痕が残る。内外面とも全面回転ナナ調整を行なう。	色調は内外面とも灰褐色を呈す。胎土は、砂粒を若干含み、焼成は良好で堅緻である。
9	甕	高台径 残存高 6.4 2.0	高台は貼付け高台で、疊付部の中央に凹縫が巡り、内側で接地する。	底部中央は水びきナナ調整を行なっている。	色調は、淡灰色を呈し、焼成は良好で堅緻である。
10	瓶子	高台径 残存高 4.7 3.6	低く、小さい貼付け高台がつく。瓶付部は平底な面を有するが、内側で接地する。底部は丸味をもって上外方にのびる。	底部内面に左まわりのロクロ目が残る。外側は水びきナナ調整を行なう。	底部外周に「と」のヘラ記号が付けられている。
11	杯身	口径 高台径 器高 13.4 10.5 3.6	平底な底部から扇曲して上外方にのびる。口縁部は丸く仕上げている。底部外端付近に高台が貼付されている。	内外面とも水びき回転ナナ調整を行なう。	色調は淡灰色を呈する。胎土は細砂粒を少量含む。焼成は良好で堅緻である。

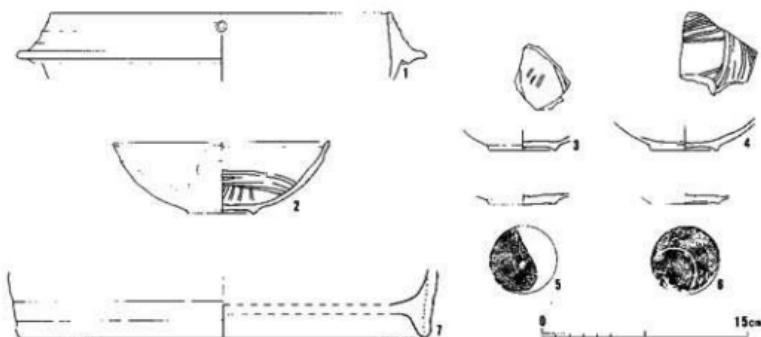
押岡番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
12	甕	復元口縫 残存高	口縫部は短く、くの字状に外反する。口縫端部は上下にわずかに肥厚し、沈線が進る。肩部は下外方に下る。	頂部から胴部残存部全面右上りのタキを行なう。口縫部はヨコナナ調整を施す。	色調は、黄褐色を呈する。胎土は、比較的砂粒を含ます傾向である。
13	甕	底径 残存高	底部は、比較的平坦で、胴部は上外方にのびる。	外面は、底部附近をヨコ方向に、その上方は右上りのタキを行ない。部分的にハケ目調整もみられる。底面は、不整方向のヘラケズリを行なう。	外面は、黒褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は、0.1~2ミリの砂粒を多く含む。
14	鉢	復元口縫 残存高	口縫部は短く外反する。胴部は、内側しながら底部に下る。	外面全面に細かいハケ目調整を行なう。内面の口縫部はヨコナナ、胴部はヨコハケがみられる。	外面は黄褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土は砂粒をほとんど含まず傾向である。
15	高杯	底径 残存高	杯部底部は、ゆるやかに外上方にのびる。脚部は円柱状の脚柱部と下外方に開く脚底部からなる。円孔を3方に穿つ。	杯部内面はヘラ磨き、外面はハケ目。脚部外面はヘラ磨き、内面はヘラケズリ。脚部内面はヘラマガキとハケ目。内面に板ナナテ調整を各々行なう。	外表面とも黄褐色を呈する。0.1~3ミリの砂粒をやや多く含む。

遺構に伴う遺物（第11図1~7）

押岡番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	羽釜	復元口径 残存高	口縫部は内輪気味に上方にのび、端部は丸い。口縫部外圍に門線が3段造り、2段目に円孔が穿たれている。鋤は水平にのびる。	体部外面はヘラケズリ、内面はハケ目調整で、他面はナナテしている。	灰褐色を呈しているが、脚部下面以下には、焼が付着している。胎土は細砂粒を多く含む。
2	壺	口径 器高 高台径	断面が鈍い三角形を呈する高台がつく底部から内側しながら体部につづく。口縫部は体部との境に凹凸をもつ。	器表の磨減が著しいので明確ではないが、内面は細い暗文が密に施され、見込みには格子状の暗文を施している。	胎土は精良である。断面は灰白色で器表は灰黒色を呈する。
3	壺	残存高 復元高台径	断面三角形を呈した高台がつく。器壁はうすい。	体部内面には細い暗文がみられる。見込みにも5ミリ間隔に暗文が施されている。	胎土は精良である。
4	壺	残存高 高台径	断面三角形を呈した高台がつく。体部は内側しながらあがる。	体部内面に細い暗文を施している。見込みには不等間隔の螺旋状の暗文が入る。外面上にも不定方向に暗文が施されている。	胎土は精良である。
5	壺	残存高 底径	底面は平底で、体部は外方に開く。	底部は右まわりの糸切りである。他面は回転ナナテ調整を行なっている。	胎土は微砂粒を若干含む。外表面とも淡褐色を呈する。
6	壺	残存高 底径	底面は内底み氣味に平底に仕上げられている。体部は外方にのびる。	底部は右まわりの糸切りである。内面は平滑にナナテ調整されている。	胎土は精良である。内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好。
7	蓋骨器	復元底径 残存高	上げ底の底部で接地面は丸い。側面はわずかに外傾しながら上方にのびる。	底面と側面には各々接合跡が残る。	胎土上に0.1~2ミリの砂粒を多く含む。その他に蓋母も含まれており地元の土ではない。

遺構に伴う土器（第11図1～7 図版5）

1は、溝状造構03の埋上から出土した土師質の羽蓋である。2～6は、井戸状造構の井戸底面から出土した瓦器碗と糸切底を有する土師皿である。7は、石積状古墓の墓坑内から出土した土師質の藏骨器と考えられる。



第11図 溝状造構03、井戸状造構、石積状古墓出土土器拓影実測図

屋瓦

今回の調査において、平安時代末期～室町時代にかけての瓦類が多量に出土した。瓦の種類は、6種類以上で鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦、捺印のある瓦、玉縁付丸瓦、半瓦などである。瓦類の大部分は、未整理のため瓦の製作技術等については後日、本報告書にゆずるが、今回は主な瓦類を抽出して概述する。図示した瓦類は、第12図8を除いて溝状造構03内より出土した。

鬼瓦（第12図1～3 図版6）

1は、表面の縁部に沿って縱方向の文様が配され線刻内に直徑2.5cmの竹管文を有する鬼瓦の欠損品である。現存長20.5cm、最大幅12.0cm、厚部6.0cmを測る。裏面は、ヘラ削りによる縱方向の調整を施している。胎土は、粗い砂粒を含み焼成は軟質で暗灰色を呈する。2・3は、顔面を有する鬼瓦の欠損品である。2は、眼窓の残片で眼窓が突出しており眼窓に沿って隆起線を描く。3は、頭部から両眼窓にかけて残存する。2とは対称的で、2が眼窓が突出するのに対して3の眼窓は竹管文状を呈し直徑2.0cm前後を測る。顔面の調整は、眼窓下部にヘラ削りを施す。胎土は、緻密であり焼成は堅緻で暗灰色を呈する。

軒丸瓦（第12図4～7 図版6）

4～7は、内区に梵字を有する軒丸瓦である。4は、瓦当面の残存状態は良好で直徑14.6cm、周縁径2.2cm、外区8.0cm、内区9.5cmを測る。瓦当面の外区縁は、連珠文帯の珠文が33粒巡っている。内区の中央に梵字を有する。胎土は粗い砂粒を含み焼成は軟質で灰黄色を呈する。5は、瓦当面を部分的に残存するが周縁、外区縁を欠損する。直徑13.0cm、周縁径1.5cm、外区1.0cm、

内区×8.0cmを測る。外区は、連珠文帯で内区の中央には梵字を有する。瓦当面と丸瓦で接合面が認められる。胎土は、細砂粒を含み焼成はやや軟質で灰黄色を呈する。6・7は、瓦当面の欠損品である。瓦当面の文様帯は、同種で外区は連珠文帯で内区の中央に梵字を有する。胎土は粗い砂粒を含み焼成はやや軟質で灰黄色を呈する。

三巴文軒丸瓦（第12図8～11 図版7）

8は、溝状遺構02の堆土より出土した三巴文軒丸瓦である。瓦当面の復元径は16.0cm、周縁径1.2cm、外区2.5cm、内区×8.6cmを測る。瓦当面の文様は、外区縁には細隆線と連珠文帯が巡り内区は左廻りの三巴文で頭部は扁平で尾部にかけて細長く巡っている。瓦当の表面には、縱方向のヘラ削りの成形痕が残る。胎土は、細砂粒を含み焼成は軟質で暗灰色を呈する。9は、周縁が殆んど欠損しているが瓦当面の残存状態は良好である。直径15.0cm、内縁径1.2cm、外区2.4cm、内区×8.5cmを測る。外区縁に一条の細隆線が廻り連珠文帯の珠文数20粒が巡る。内区の三巴文は右廻りで頭部は太く胴部から尾部にかけて細身になる。瓦当面と丸瓦で接合面が認められ、瓦当裏面はナデ調整を施している。胎土は、細砂粒を含み焼成は堅緻で暗灰色を呈する。10・11は、瓦当面の欠損品である。瓦当面の文様は、同種類で10の内区の三巴文は左廻りである。頭部は扁平で尾部にかけて細長くなる。溝状遺構01出土の三巴文瓦と類似する。11は、三巴文は右廻りである。頭部は太く尾部にかけて細長くなる。胎土は、細砂粒を含み焼成は軟質で灰黄色を呈する。

唐草文軒平瓦（第12図12 図版7）

瓦当面の残存状態は良いが下弦は欠損する。全長22.5cm、上弦幅22.0cm、外区厚さ0.3cm、内区厚さ2.5cmを測る。瓦当面の文様は、上下弦の外区縁に細隆線が区画され内区には唐草文系の文様と両端に梵字を有している。平瓦の四面は、ナデ調整を施し布目痕が周縁外面に残る。胎土は、細砂粒を含み焼成は堅緻で暗灰色を呈する。

連珠文軒平瓦（第12図13 図版7）

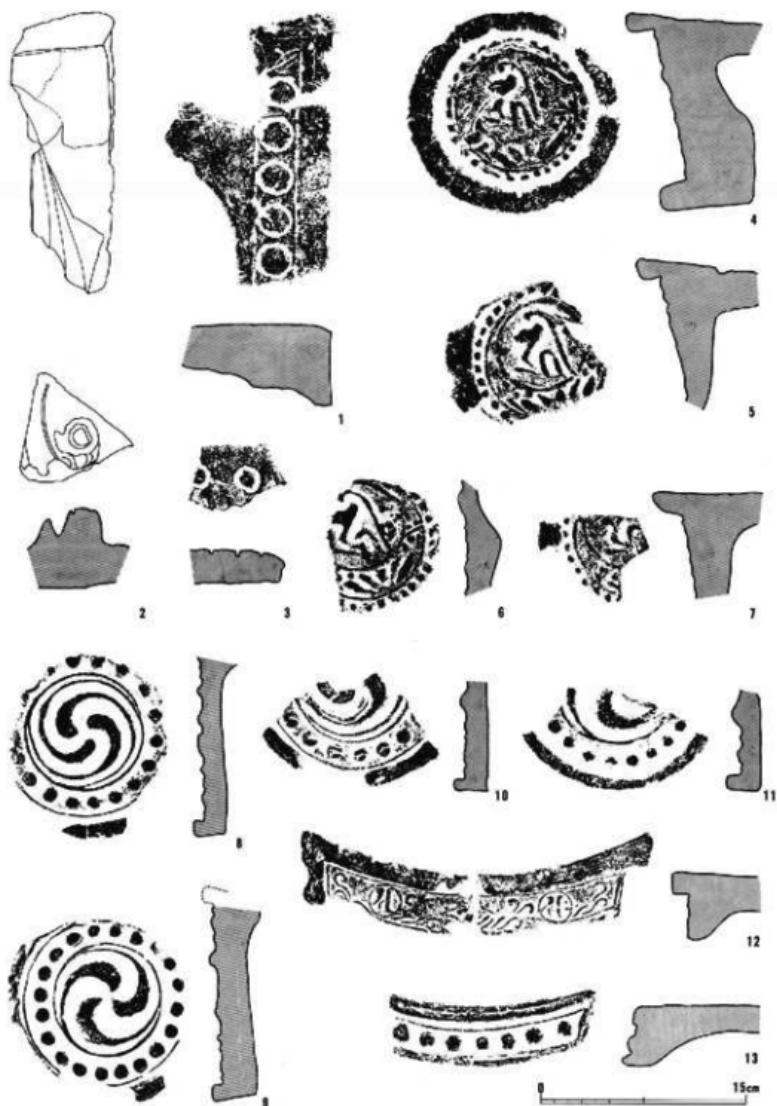
瓦当面は左端部を欠損する。現存長15.5cm、外区厚さ0.5cm、内区厚さ1.7cmを測る。瓦当面の文様は、上部周縁の中央に浅い沈線を配し外区縁が区画されている。内区は直徑1.2cm内外の連珠文帯が巡っている。胎土は、細砂粒を含み焼成は軟質で灰黄色を呈する。

捺印瓦（第13図14～16 図版8）

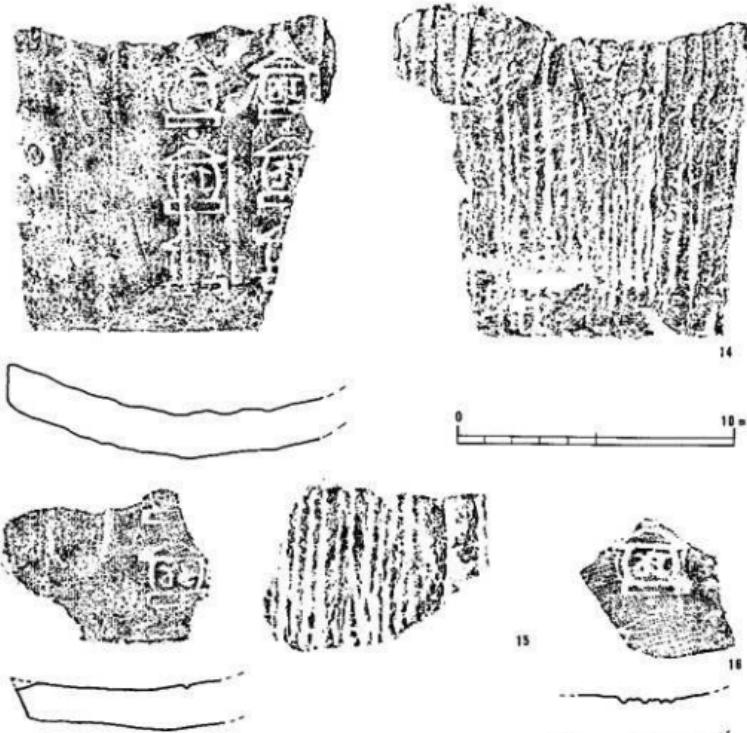
五輪塔の捺印を有する平瓦である。14・15は、溝状遺構03より出土した。16は、第3層上面で出土した。14～16は、凸面は荒い繩目の叩き目調整で凹面は牛乾きの段階で五輪塔の捺印が押されて、荒い布目痕が残る。水輪には、梵字を表現している。14の凹面中央に均整のとれた五輪塔の捺印を有し、縱位3列横位2列である。15・16は、2ヶ所に捺印を有する。胎土は、粗い砂粒を含み焼成は堅緻で暗灰色を呈する。

丸瓦（第14図17～20 図版8）

17は、玉縁付丸瓦の完形品である。全長36.8cm、幅15.5cm、厚部1.5cmを測る。凸面は、繩目



第12図 溝状遺構 02、03 出土瓦拓影実測図

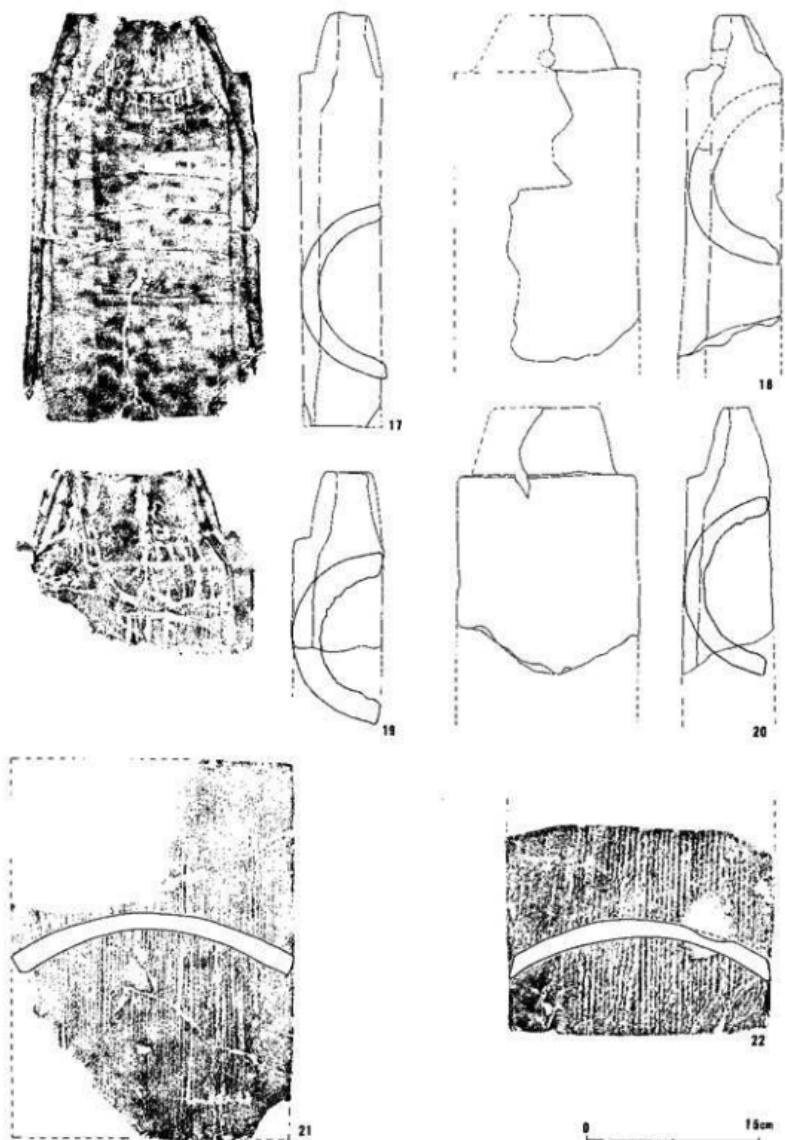


第13図 换印瓦拓影実測図

の叩き目をほとんど摩り消して正縁と丸瓦の端部に部分的に縫口が残る。凹面は、布目圧痕を残し横位のナデ調整で側面と凹面端部にかけて、ヘラ削りによる面取り調整が施されている。胎土は、細砂粒を含み焼成は堅緻で暗灰色を呈する。18~20は、半欠品である。18は、玉縁端部に直径1.4cmを測る釘穴を中央に穿する。18~20の凸面は、縫口の叩き目をほとんど摩り消している。凹面は、布目圧痕を残し20は横位のナデ調整を部分的に残す。胎土は、粗い砂粒を含み焼成は軟質で暗灰色を呈する。

平瓦（第14図21~22 図版8）

21は、完形に近く全長34.0cm、広端面幅24.5cm、狭端面幅20.5cm、厚部2.0cmを測る。凸面は、縫位の荒い縫口叩き目調整で凹面は、ナデ調整が施され部分的に布目圧痕が残る。側面は、ヘラ削り調整を残す。胎土は、粗い砂粒を含み焼成は堅緻で暗灰色を呈する。22は2次焼成のある半欠品である。凸面は、縫位の縫口叩き目調整で凹面は、磨滅しており部分的に布目圧痕が残る。側面は、ヘラ削り調整を施す。胎土は、細い砂粒を含み焼成は軟質で茶褐色を呈する。



第14図 溝状造構 0.3出土瓦拓影実測図

VI. 要 約

発掘調査の概要を述べてきたが、若干の問題提起をし、まとめにかえたい。

今回の発掘調査において、重複する2枚の文化層を検出した。上・下層各遺構は前述のように遺存状態が良好ではなく、中世以降に造構の大部分は削平をうけている。

上層の遺構では、文献史料にみられない中世寺院跡が注目される。寺院は、立地条件の適合した段丘端に創建され、建立に際し大規模な整地作業が施行されていた。寺院遺構は、後世の削平によりその構造、配置、規模などについては全容を把握することは困難であった。主な検出遺構としては、建物跡に伴う瓦溜の雨落溝がある。雨落溝内からは、11世紀前半から13世紀後半にかけての多量の瓦類が一括で出土した。瓦類から推定して寺院創建年代は、平安時代末期から鎌倉時代前半に比定できる。寺院廃絶年代は、検出遺構上層面出土の遺物が被災により2次焼成を受けている点から室町時代以降と想定できる。

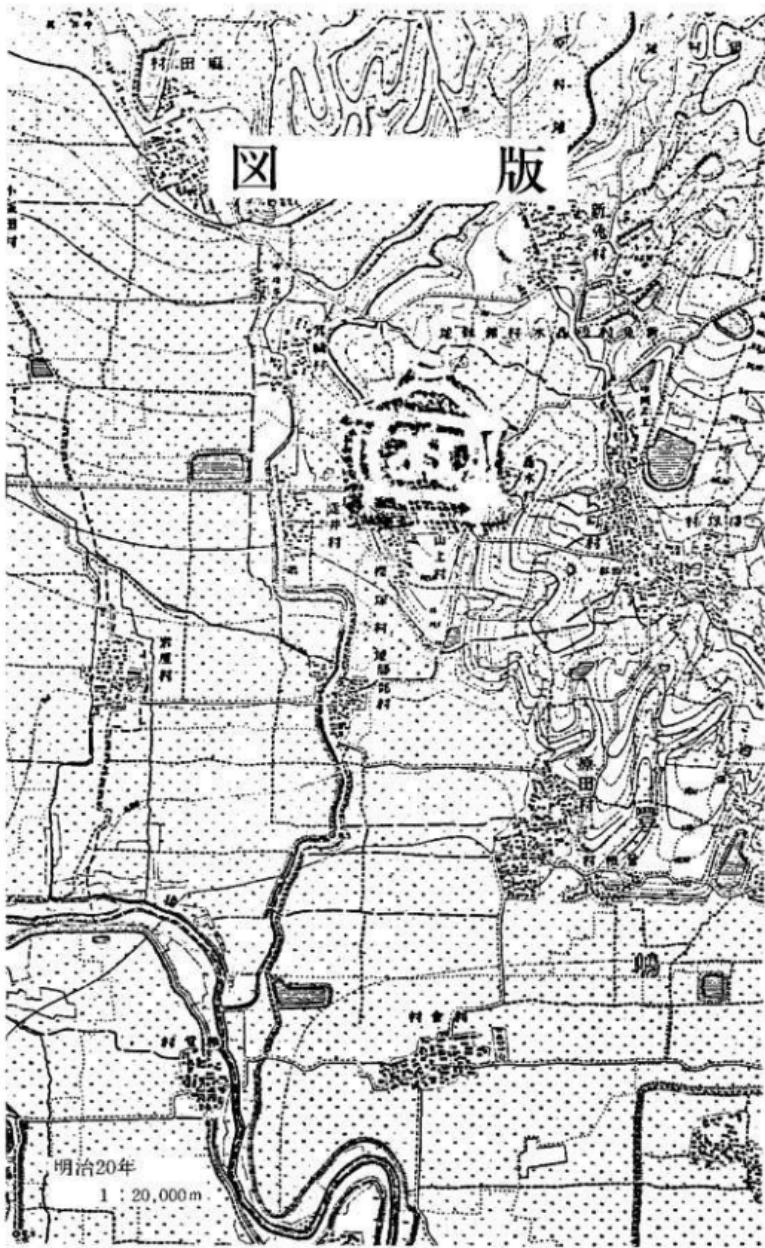
下層遺構では、生活面は全域に及んでいなかったが、A～B-4～5地区にかけて6世紀後半の遺構が検出され、その中でも掘立柱建物跡が注目される。

次に出土遺物であるが、寺院遺構に伴い水輪に梵字を配した五輪塔を形どった捺印瓦と梵字瓦が計7点出土した。捺印瓦の五輪塔の印形には差異が認められ、2種類の印刻を使用していたと考えられる。梵字瓦は瓦当面内区に梵字を有する軒丸瓦と軒平瓦である。梵字瓦は平安時代中期以降に中世庶民の仏教、密教信仰の高揚と共に生産されており、本寺院跡においても溝状遺構より一括資料として検出した。

以上、調査結果を要約したが、今回の発掘調査では、文書に記載されていない中世寺院跡の検出に最も意義がもたられよう。しかしながら、寺院跡の規模は比較的広範囲に及ぶものと思われるがその全容は掴めず、また、本寺院に瓦を供給した窯址も現状では確認されていない。それらも含めて今後の課題となろう。

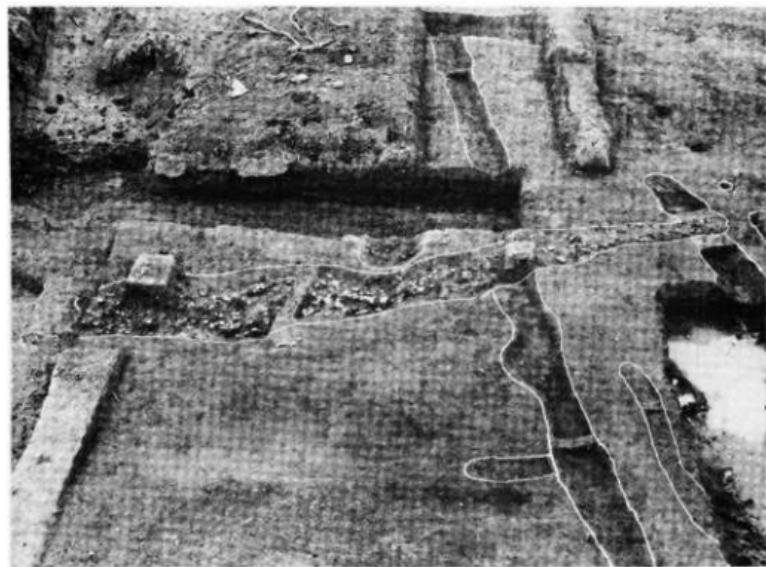
図

版

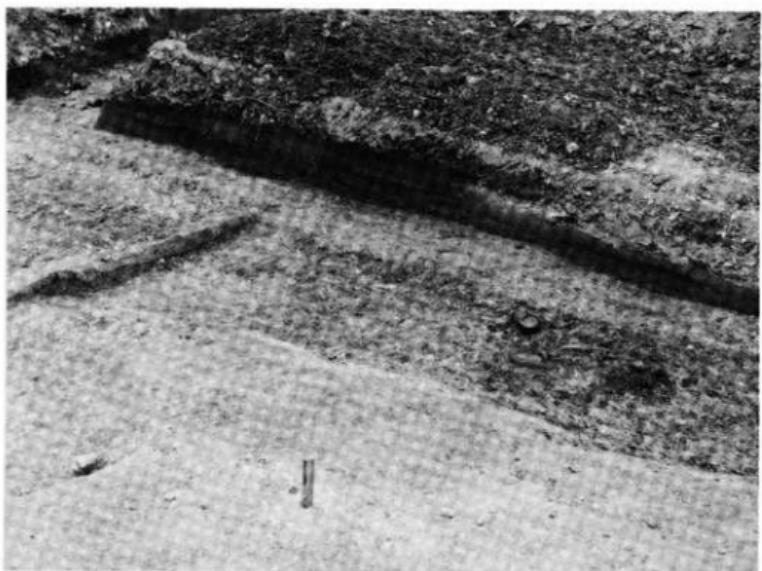




(1) 調査区域の全景（北より）



(2) 満状造構 0.2 全景（東より）



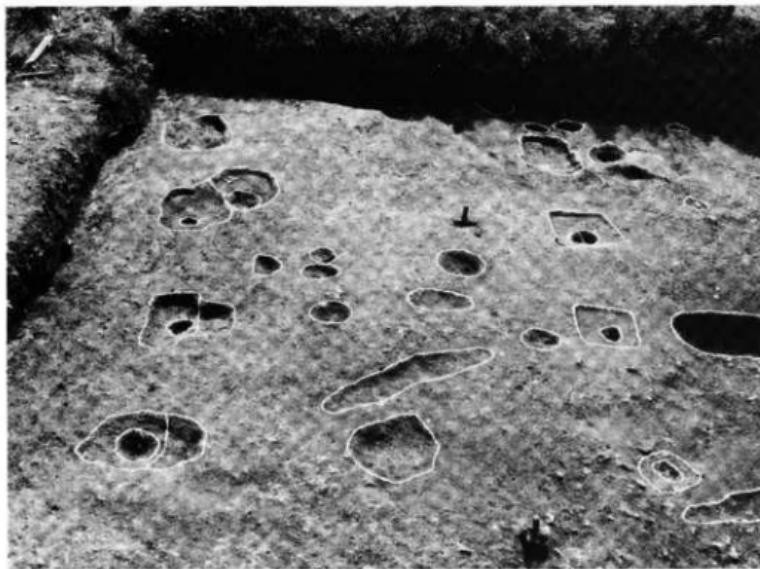
(1) 溝状道路 0-3 全景 (北東より)



(2) 石積状古墳 0-1 全景 (南より)



(1) 井戸状遺構 01 全景（北より）



(2) 挿立柱建物跡 01 全景（北より）



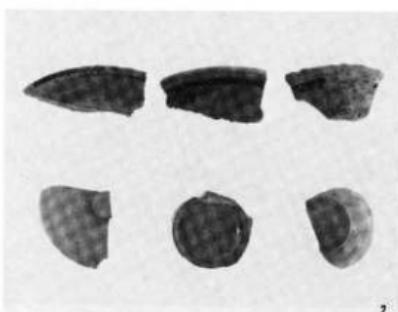
(1) 溝状遺構 0_3 五輪塔捺印瓦出土状態



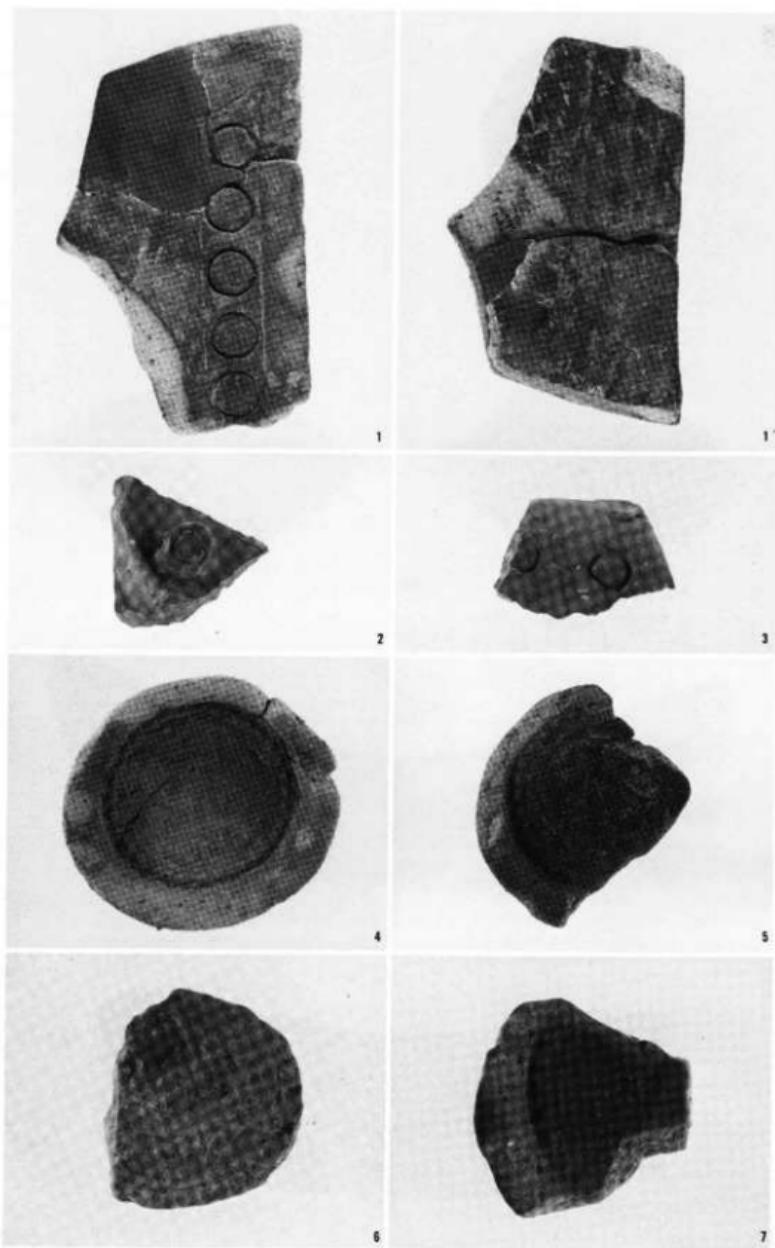
(2) 溝状遺構 0_3 三巴文軒瓦出土状態

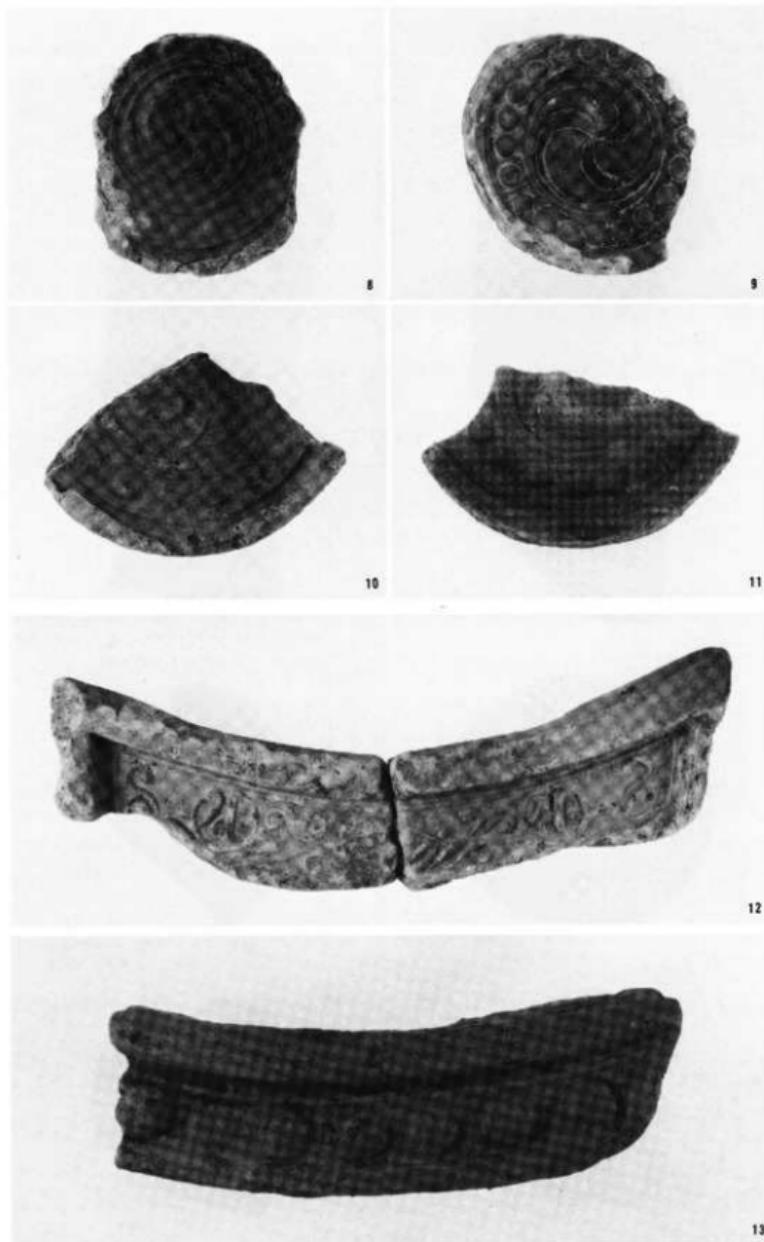
圖版 5 山ノ上遺跡（寺院跡）

須恵器・土師器・弥生土器・瓦器



図版 6 山ノ上遺跡（寺院跡）
鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦







14



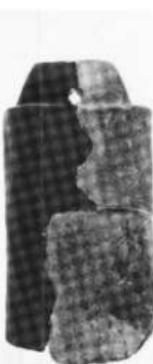
15



16



16'



17



17'



18



18'



19

大塚古墳

本文目次

Iはじめに.....	31
II 桜塚古墳群と周辺の遺跡.....	33
III 調査結果	
1 墳丘・周濠.....	34
2 主体部.....	35
3 出土遺物.....	40
1) 鉄器類	
2) 玉類	
3) 埋輪	
IVまとめ.....	43

挿図目次

第1図 大塚古墳位置図.....	31
第2図 周辺遺跡分布図.....	32
第3図 明治の絵図にみる大塚古墳.....	33
第4図 墳丘測量図・トレンチ配設図.....	34
第5図 第1主体部平面図.....	35

第6図 第1トレンチ・埴丘平面・断面図	36~37
第7図 第2主体部遺物配置模式図	39
第8図 第1主体部鐵器類実測図	40
第9図 第1主体部土類実測図	41
第10図 円筒形埴輪実測図	42

図版目次

図版1 大塚古墳航空写真（朝日新聞社提供）

図版2 大塚古墳

- 1 調査前の状況
- 2 第1トレンチ、1段目テラス埴輪出土状況（平面）

図版3 大塚古墳

- 1 第1トレンチ、1段目テラス埴輪出土状況（立面）
- 2 第1トレンチ、筒漆検出状況

図版4 大塚古墳

- 1 第1主体部検出状況
- 2 第1主体部土類出土状況

図版5 大塚古墳

- 1 第2主体部、被覆粘土上面検出状況
- 2 第2主体部、遺物配置状況

図版6 大塚古墳、出土遺物（鐵器類・玉類）

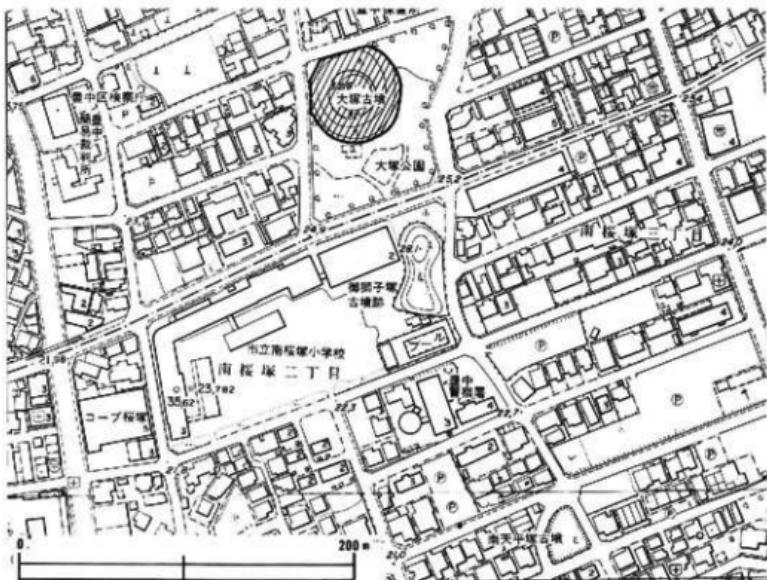
図版7 大塚古墳、出土遺物（埴輪）

I. はじめに

大塚古墳は、豊中市中桜塚4丁目15番地に所在する。当墳を含む桜塚古墳群は、北摂有数の古墳群として周知され、明治の絵図によれば36墳が残存していた。その構成は、大きく東群と西群に二分される。大塚古墳はそのうち東群の盟主墳とされるもので、墳形は円墳で、直径約50m強、幅10~18mの周濠を有すると、市史に記載されている。

昭和10年から12年にかけて、桜塚古墳群中、東群は区画整理事業の波にのまれ、狐塚、北天平塚、南天平塚各古墳が発掘調査され、狐塚と北天平塚古墳は消滅し、南天平塚古墳は削除されながらも、部分的に保存された。大塚古墳、御獅子塚古墳は、大阪府史蹟調査会の努力により公園として保存され、現在に至っている。

その後40数年を経て、自然的な盛土流失や、墳丘に自由に入りできるため、子供達の格好の遊び場として損壊を受け、昭和50年頃から副葬品の露出が始まり、近年特に玉類の出土を多くみるようになり、その緊急度を重んじ、主体部の緊急調査と墳丘の残存状態、周濠の規模等の基礎資料を得るために実施したものである。



第1図 大塚古墳位置図



- | | | |
|---------------|-------------|----------------|
| 1. 莳池西遺跡 | 9. 原田神社出土銅鐸 | 17. 豊島北遺跡 |
| 2. 御神山古墳 | 10. 下原窯跡群 | 18. 利倉北遺跡 |
| 3. 南刀根山遺跡 | 11. 原田遺跡 | 19. 利倉遺跡 |
| 4. 新免宮山古墳群 | 12. 曾根遺跡 | 20. 椎童遺跡 |
| 5. 金寺廃寺(新免廃寺) | 13. 城山遺跡 | 21. 利倉西遺跡 |
| 6. 新免遺跡 | 14. 田能遺跡 | 22. 上津島猪名川川床遺跡 |
| 7. 新免上佃古墳 | 15. 勝部遺跡 | 23. 服部西遺跡 |
| 8. 桜塚古墳群・大塚古墳 | 16. 曾根南遺跡 | 24. 穂積遺跡 |

第2図 周辺遺跡分布図

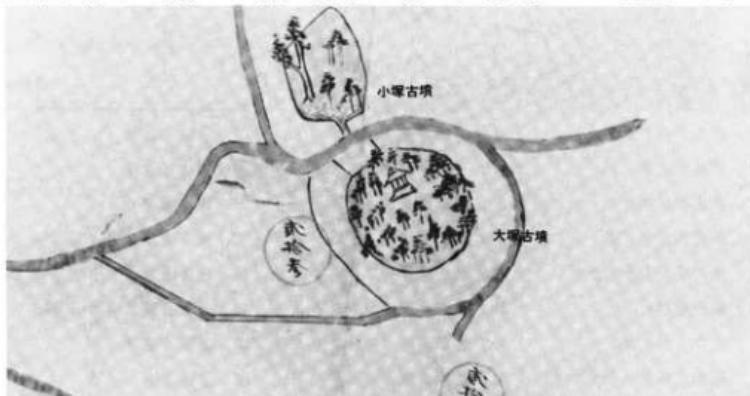
II. 桜塚古墳群と周辺の遺跡

大塚古墳を含む桜塚古墳群は北摂有数の中期古墳群として周知されている。古墳群の立地は、千里丘陵の一部島熊山を頂点とする一支丘陵上、通常農中台地と呼ばれる台地の南方部分標高約26m前後に位置する。当古墳群は、明治の絵図によると大石塚・小石塚古墳を中心とする西群と大塚古墳を中心とする東群に大きく二分され、36墳存在したとされている。しかし現在では大石塚・小石塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳と当古墳の5基しか残存していない。当古墳群の年代は、狐塚古墳、北天平塚古墳、南天平塚古墳の調査などから古墳時代中期後半を中心とする古墳群と理解されてきたが、大石塚・小石塚古墳の調査から前期末まで遡りえる古墳群であると考えられるようになった。

周辺の遺跡としては、西方の猪名川を中心とする低地に著名な遺跡が所在する。弥生時代には、勝部遺跡、田能遺跡、弥生時代終末から古墳時代にかけては穂積遺跡、庄内遺跡、島田遺跡、利倉西遺跡などである。

古墳に目を転じると、前期古墳は待兼山古墳、御神山古墳、新免上佃古墳と点的に存在し、中期になると桜塚古墳群に集約される。後期になると桜井谷古窯跡群との関係で陶棺を納める太鼓塚古墳、新免宮山古墳群と北方に位置するが、近年穂積遺跡の調査で削平されているものの円墳が検出され、低地にも古墳が存在する可能性が窺れるようになった。このように後期になると、また小地域的に分散するようになる。

以上のような当地域の古墳時代の概観の中で桜塚古墳群は特異な存在であり、大阪府域に広げてみても同様な存在である。当古墳群の存在は、西摂平野東部を掌握していることはもちろんであるが、それと同様にその時代の中心部との結びつきが強く感じられる古墳群である。



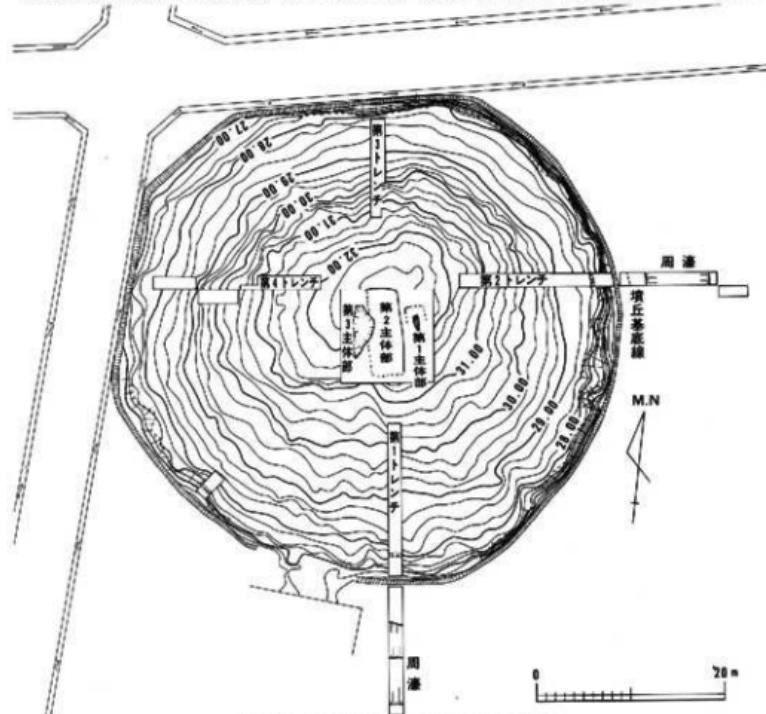
第3図 明治の絵図にみる大塚古墳

III. 調查結果

1. 填丘・周濱

明治の絵図面によると墳頂には祠があり、また調査前の状況において、調査の発端となった第1主体部からの遺物の流出などによってわかるように墳頂はかなり削平されていることが考えられた。案の定第1主体部の墓壇の掘りかたもほとんど検出されず、かろうじて北西の隅で輪郭を検出できたほどである。また墳丘は調査前の測量図から二段築成の円墳と思われたが、1段目テラスと思われた部分がすべて墳頂部からの流出土であることが調査の結果判明し、1段目テラスは裾部で残存していた。その結果、直径56m、高さ現存で約8mの三段築成の円墳になると推定される。

調査は頂高最高所を基点とし、90°に割りつけ、南側より左まわりに第1、第2……トレン



第4図 墳丘測量図・トレンチ配置図

すとし、第1トレンチと第2トレンチで周濠の確認を行なった。第5トレンチは墳丘の中心点を求めるために1段目テラス埴輪列を検出する目的で墳丘基準杭より45°振って設定した。

墳丘の状態は第1トレンチを代表して述べることにする。

第1トレンチでは、周濠と1段目テラス面、2段目斜面を検出した。墳丘基底部は石垣の直下にあたるため検出できなかった。1段目テラスは幅約3.6mで上下2層の化粧を行ない、テラスの中心より外側に埴輪を樹立させ、埴輪は幅約30cmの溝状の堀りかた内に約10cmの間隔で配置している。径は1段目突帯付近で20~25cmを計り、統一されていない。2段目斜面長約4.8m(現存)、傾斜角35°である。

周濠は幅約12~13m、深さ約1mで二段に掘られている。したがって周濠を含めると直径約80mとなる。

墳丘盛土の状態は1段目テラス化粧土の下層はすべて地山で、2段目斜面内に黒灰色の灰層が約15cmの厚さで水平に堆積している。この上部はすべて盛土で、大きく1m内外の厚さで中心部に内傾するように盛られている。

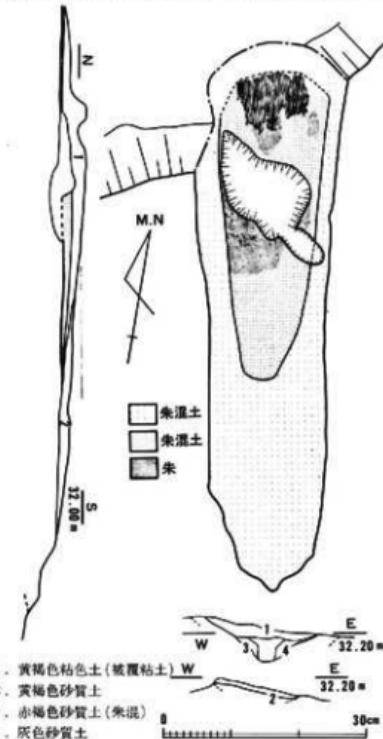
2. 主体部

墳頂部で中軸を南北方向にとり、並列された3体の主体部を検出した。調査の発端となった東端の主体部を第1主体部と呼称し、墳丘中心部西側に向って第2、第3主体部と呼称した。

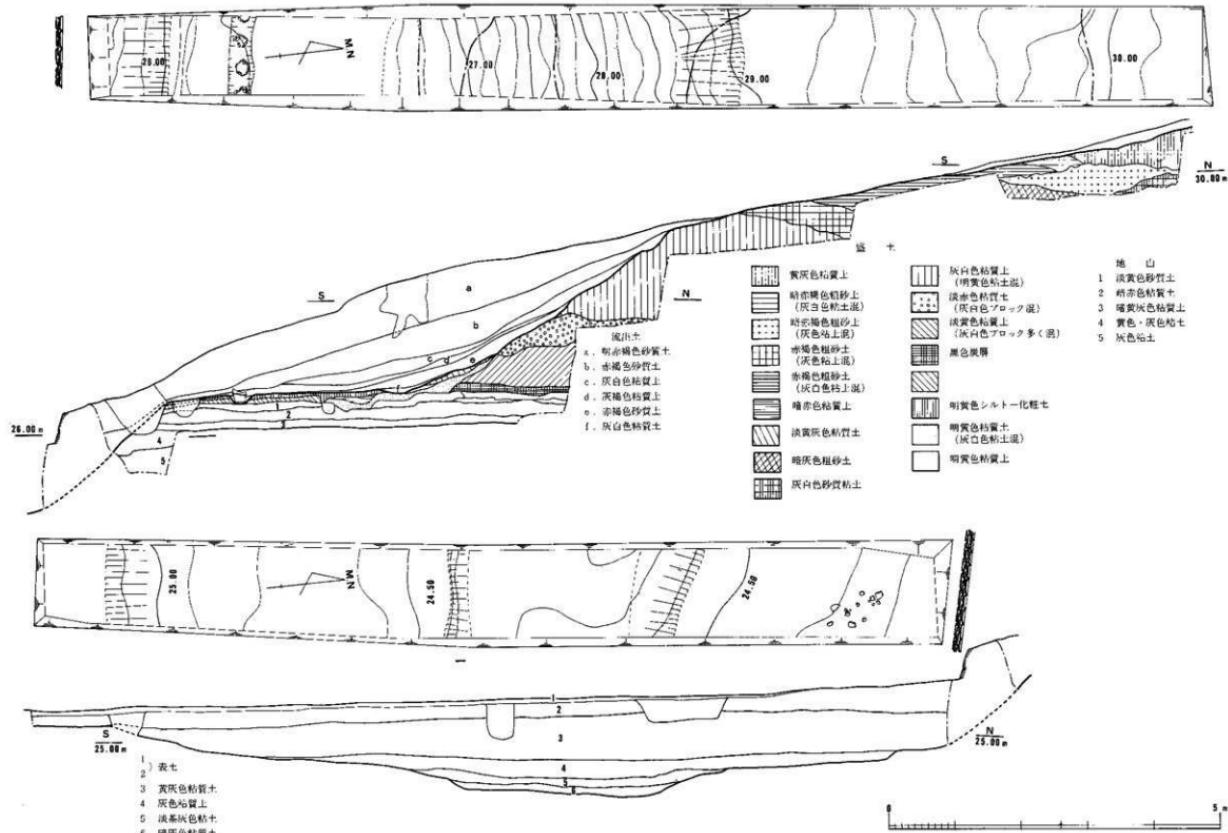
第1主体部

墳頂東寄りに露出していたもので、調査前に鉄刀3口、勾玉2個、ガラス玉(大)5個(小)3個、管玉1個がすでに表採されている。調査の結果、残存部はわずかで棺床長さ約90cm、幅約30cm、深さ約5cmで北半部に玉類が集中して出土した。調査以前に出土した鉄器類は残存部の南側に統くものであることを前任者から報告を受けているので、棺はおそらく2~3mはあったものと推定される。

なお、墓坑の掘りかたは北西部の隅でかろうじて確認できたのみで、他は流出し検出できなかった。したがって墓坑の範囲は定かにしがたい。残存部の中心軸はN-10°32'-Wである。



第5図 第1主体部平面図



第8図 第1トレンチ・填丘平面・断面図

第2主体部

第1主体部の西側約3.5m隔って、ほぼ南北に中軸をおき安置されている。墓拵の長さ9.6m、幅3.8m、墓拵の中軸よりやや西寄りに設置され、棺の北側と南側に拳大の環を數きつめ棺外の面にあわせ、両端は深く充填させている。環は棺外の両端部分のみで全周はしない。棺の長さ6.8m、幅は南側で60cm、北側で80cm、南側と北側の高低差約20cm、両端部の小口は棺の内側に設置されたと思われ、その外側に粘土を詰めている。

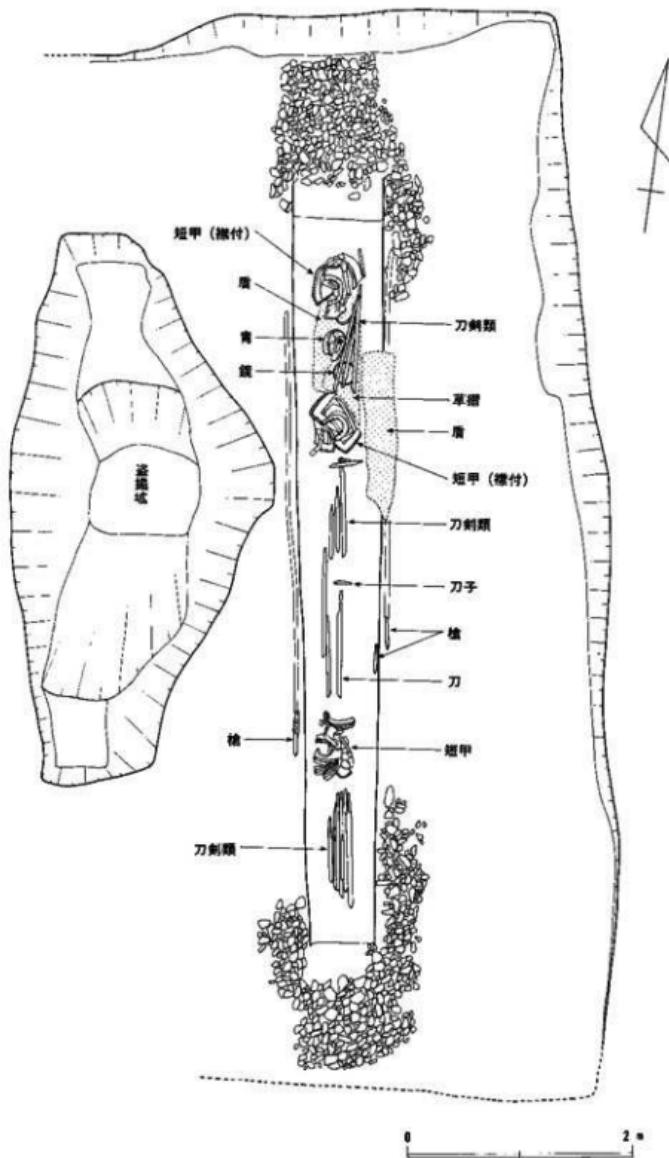
出土遺物は南側より刀剣類、短甲（頭鎧・肩鎧とセット）、刀、刀剣類、短甲（襟付）鏡（方格規矩文鏡）、その上部に革摺、その東側に刀剣類、北側に冑（衝角付）2領、短甲（襟付）で盾をその上部に覆っている。甲冑類はすべて革級である。棺外は東側に切先を南に向けて2本、西側に1本で、東側中央より北部分で棺上に若干の粘土を貼り、盾を棺外の面から棺上に置いている。配置状態は以上のようなものである。棺の中心軸はN-9°-Wである。

第3主体部

盗掘により半分以上を失っている。盗掘坑の長さ約5m、その中央で直径2mの円形で深さ約2m掘り下げている。底で土師質の皿が出土した。出土上器より鎌倉から室町時代に盗掘されたものと思われる。鉄器類の残片が多く出土した。



調査風景



第7図 第2主体部遺物配置模式図

3. 出土遺物

1) 鉄器類 (第8図、図版6)

鉄鎌 完成品、破片を含め約21本分を数える。柳葉式と片刃式の二形式があり、1点の片刃式を除くほかはすべて柳葉式に属する。

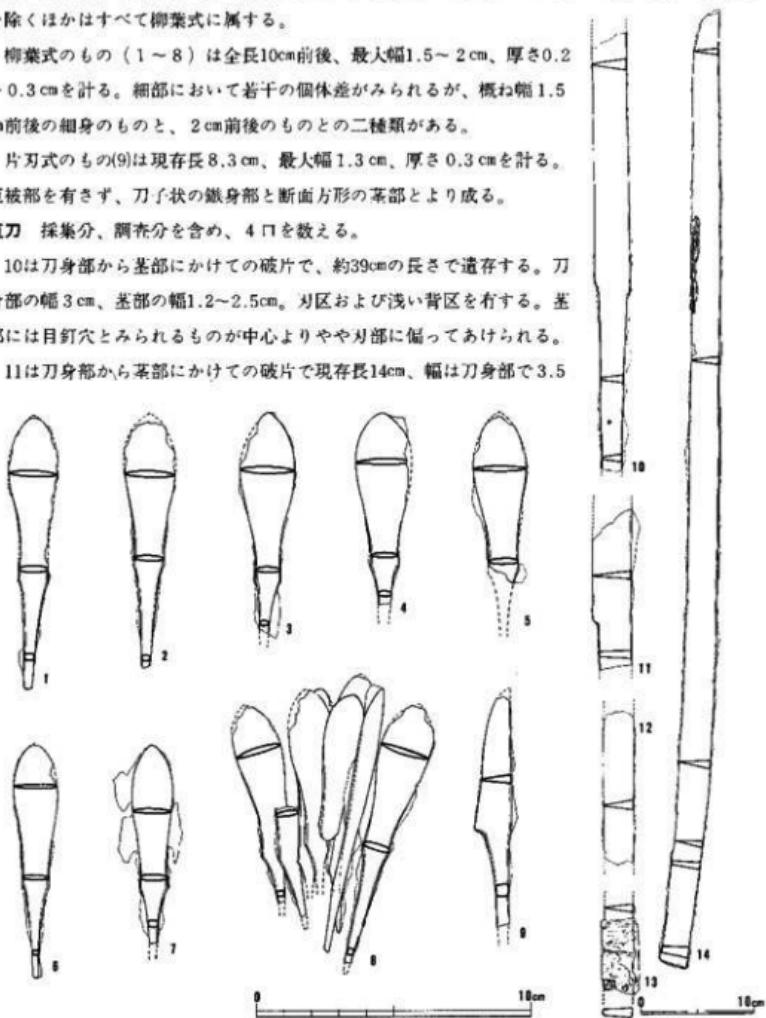
柳葉式のもの(1～8)は全長10cm前後、最大幅1.5～2cm、厚さ0.2～0.3cmを計る。細部において若干の個体差がみられるが、概ね幅1.5cm前後の細身のものと、2cm前後のものとの二種類がある。

片刃式のもの(9)は現存長8.3cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cmを計る。寛被部を有さず、刀子状の鐵身部と断面方形の茎部とより成る。

直刀 採集分、調査分を含め、4口を数える。

10は刀身部から基部にかけての破片で、約39cmの長さで遺存する。刀身部の幅3cm、基部の幅1.2～2.5cm。刃区および浅い背区を有する。基部には目釘穴とみられるものが中心よりやや刃部に偏ってあけられる。

11は刀身部から茎部にかけての破片で現存長14cm、幅は刀身部で3.5



第8図 第1主体部鉄器類実測図

cm、茎部で2.9cm。刃区を有し、茎部の断面は台形状を呈する。12は茎部の破片とみられ、現存長13cm、幅2.7cm。出土時の所見よりすれば11と同一個体と考えられる。

13は茎部で現存長7cm、幅3cm。表面に糸巻きおよび樹皮の痕跡が認められる。

14は直刀としては唯一の完形品で、全長85.2cm、幅は刀身部で2.7cm、茎部で2.5～2.7cmを計る。茎部より約26cmの範囲で顕著な内反りの傾向が認められるはかは、刀身部の大半はほぼ直線的にのびる。茎部より一旦幅を減じ、再び幅を増すが、それほど明瞭な刃区の存在は認められない。なお刀身の一部には木質が遺存し、特に納められていたものと考えられる。

2) 玉類（第9図、図版6）

玉類は第1主体部から出土した。本調査以前の表採品も含めて硬玉製勾玉1個、碧玉製勾玉5個、碧玉製管玉35個、ガラス製小玉94個、白玉2個出土している。棺内埋土の洗浄によって玉の総数が増える可能性があるが、現在のところ総数134個を数える。なお掲載した玉はすべて表採されたものであるが、本文では全体的な玉の概略を述べる。

勾玉では、深緑色を呈し美しい光沢を発する良質の碧玉製品が2個、緑色を呈する通有の碧玉製品が2個、グリーンタフ製品が1個、硬玉製品が1個出土している。通有の碧玉製品は最終研磨工程が省かれており研磨痕を残す。グリーンタフ製品は丁字頭のものである。硬玉製品は長さ1.8cmの小型品であるが非常に丁寧な作りである。両側穿孔によるものは硬玉製品のみであり、他はすべて片側穿孔である。

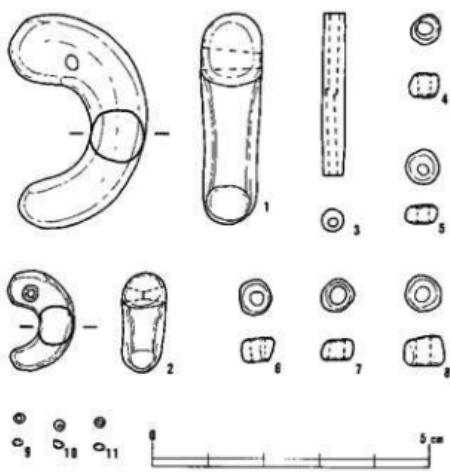
管玉の大多数は長さ2.5cm前後、径4mm前後のものである。石材はすべて広義の碧玉であるが、石質により青緑色を呈するもの、灰緑色を呈するもの、暗緑色を呈するもの、の三者が認められる。

小玉は算盤玉状の白玉とガラス玉である。白玉は明灰白色を呈し、石材は不明である。

ガラス玉は96個出し、そのうち5mm前後のものと2mm強のものに分けられる。大形の玉の基本的な色調は不透明な紺色である。成形法は管切り、巻きつけの2方法が観察される。

小形の玉の基本的な色調はコバルトブルーを呈するものと黄味緑色を呈するものがある。

成形法は大半が管切りによるものと思われる。



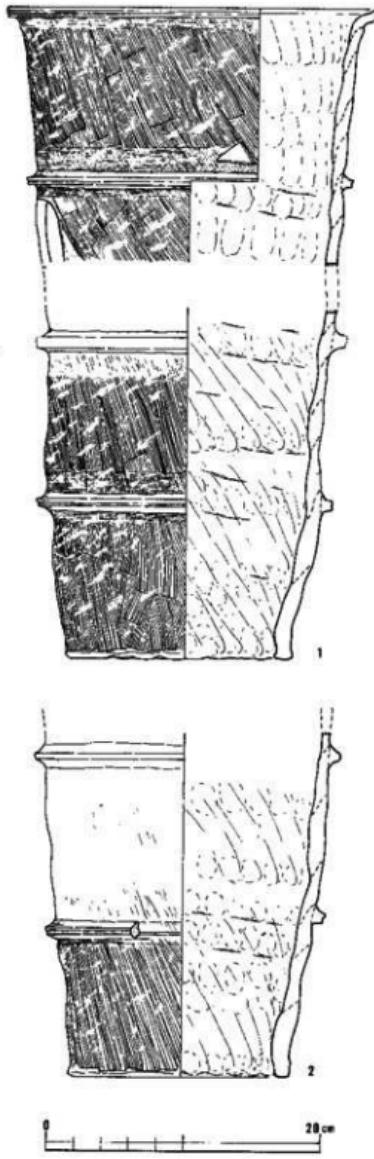
第9図 第1主体部玉類実測図

3) 墳輪（第10図、図版7）

今回の調査により出土した埴輪は円筒形埴輪が多数を占め、朝顔形埴輪、形象埴輪が若干含まれている。墳丘各トレンチより検出した埴輪12個体分、および各調査区より出土した埴輪の詳細については本報告に譲ることとし、ここでは第5トレンチより検出した墳丘第1段テラス面の埴輪のうち円筒形埴輪2個体について述べる。

1. 推定器高約47cmを計る。口径26.5cm、底径16.5cmでやや下細りの形態をなし、3条の突帯をめぐらしている。口縁部は如意形に外反する。透孔は2種類がみられ、3段目に円形、最上段突帯直上に三角形を穿つ。上2段における透孔の数は欠損のため不明であるが、透孔の位置関係より段を進めて互い違いに穿孔するものと思われる。突帯は端面の凹んだ、幅の狭い突出度の高いものである。外面調整は縦位の細かい刷毛目を右回りに施しているが、基底部より最上段まで一気に施すのではなく、ある程度の調整幅を保ちつつ順々に上方に向かって仕上げている。突帯は外面調整ののち製作されている。その調整は端面を刷毛目状の工具により横方向にナデた後、上面及び下面を横方向にナデるもので、結果として端面には凹みが生じている。内面調整は左上りのナデである。なお外面には黒斑がみられる。

2. 第2段突帯付近まで残存する。残存高25cm、底径16cmを計る。突帯は幅の狭い突出度の高いもので、端面は凹んでいる。外面調整は縦位の細かい刷毛目で、基底部から上方に向かって右回りに施している。



第10図 円筒形埴輪実測図

突帯は刷毛目調整の後つけられているが、付設前にヘラによる沈線を施していることが突帯剥離箇所より観察される。突帯は端面を刷毛目状工具によってナデた後、上面及び下面を横方向にナデるもので、端面には凹みが生じている。内面調整は左上り及び横方向のナデである。外面には黒班がみられる。

以上2個体について述べた。両者とも外面には赤色顔料が部分的にみられ、本来外面全体に塗布されていたものと思われる。これらの埴輪について特に注目すべき点は、胎土にわずかに金雲母が含まれており、明らかに在地の胎土とはみなしえないことがある。ただし全ての埴輪の胎土が搬入されたものであるかどうかは、現在整理中のため断定しえない。

IV. ま と め

今回の調査は、第1主体部から棺内遺物が露出流出し、また第2、第3主体部とも南側では棺外まで流失し、部分的には棺床粘土上も削除されている状況が判明したため実施した緊急調査である。調査も年度末にあたることなどからほとんど整理作業は進めることができず、発掘作業と概報作成作業を併行して行なっていくという状況であるため、記載した遺物はほとんど調査前のものばかりである。したがって、個々の詳細な観察は正報告書に譲ることとし、今回はこのことを約束して御許しを願いたい。そこで現在の段階での事実報告のみ簡単に述べまとめてかえることにする。

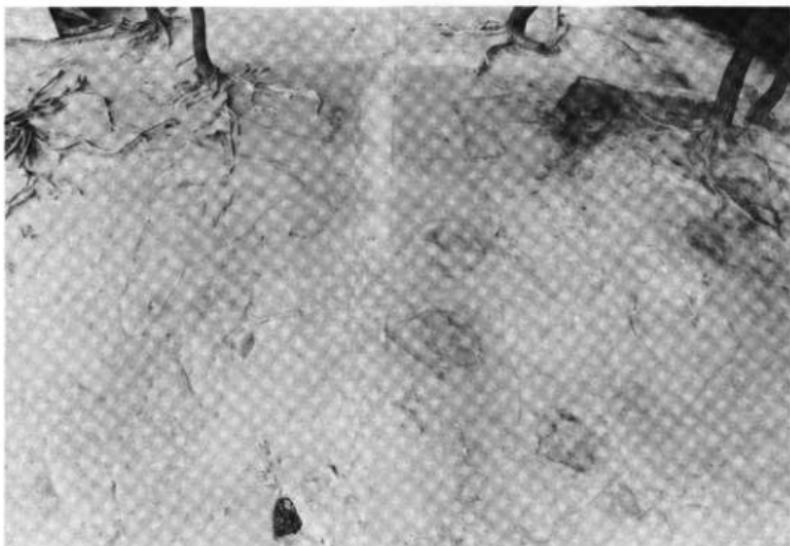
墳丘の残存状況は非常に悪く、墳頂及び2段目テラスは流失し原形をとどめていなかった。しかし1段目テラスは比較的良好残存していた。規模を再度記すると直径56m、周濠幅12~13m、周濠を含めると80m強の円墳となる。高さは基底面より現存墳頂まで約8mで当初は10m前後はあったものと推定される。墳丘盛土の状況は1段目テラスから上部、すなわち直径48m、高さ6m分はすべて盛上で、大きな単位で墳丘中心に向かって盛られている。盛土はほとんど洪積層の地山で、おそらく付近の山を削って搬んだものであろう。

主体部は第1主体部の残存状態が悪く、埋納遺物の全容を知ることができないが、第2主体部では盗掘をこうむっておらず完全な状態で納っていた。その出土遺物をみると、刀剣類、甲冑が多くを占め、鉄鎌、農工具、玉類が埋納されていないという特異なものである。武器・武具を納めながら鉄鎌が伴わないことが非常に奇妙である。玉類が伴わるのは桜塚古墳群中の南天平塚古墳、また第3主体部盗掘跡の中でも出土せず、ある意味では桜塚古墳群の性格の一端を示しているかもしれない。甲は1領が長方形板革綴短甲、2領が三角板革綴襟付短甲であり、背は三角板革綴衝角付背である。したがって甲冑はすべて革綴のものである。年代は以上のことから概ね5世紀前半の範疇に入る古墳と捉えておく。

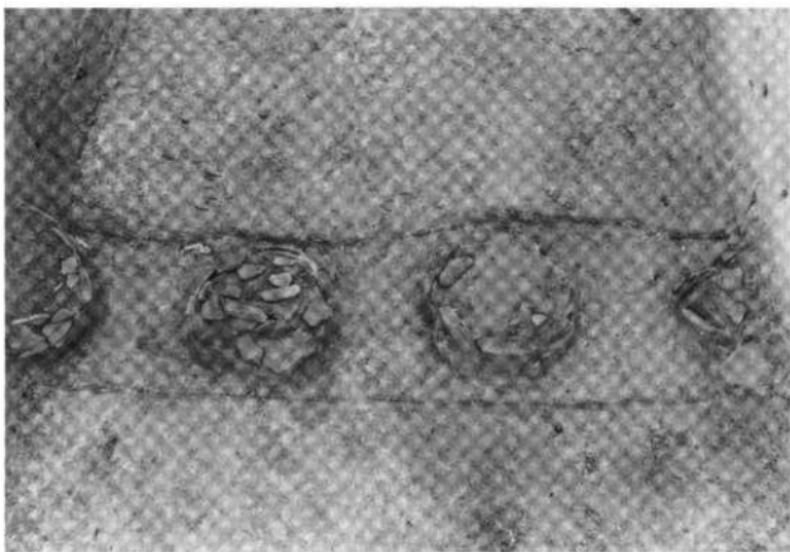
図 版



航空写真（朝日新聞社提供）



(1) 調査前の状況



(2) 第1トレンチ、1段目テラス埴輪出土状況(平面)



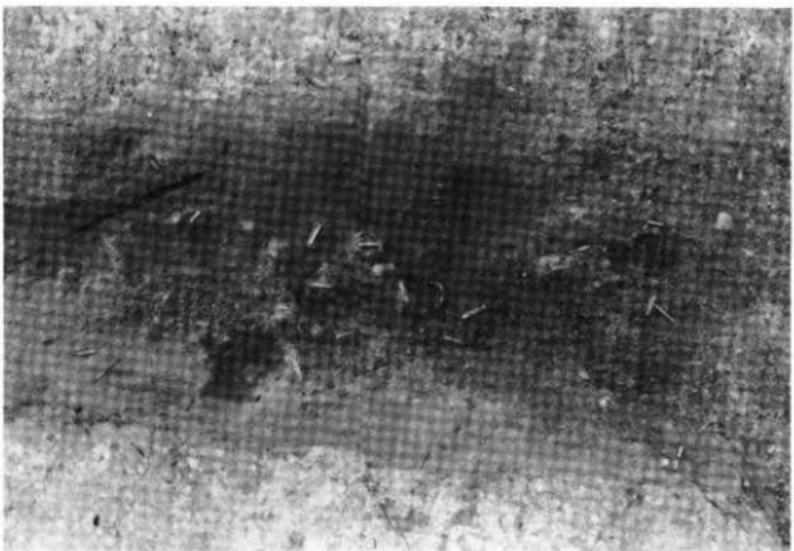
(1) 第1トレンチ、1段目テラス埴輪出土状況（立面）



(2) 第1トレンチ周濠検出状況



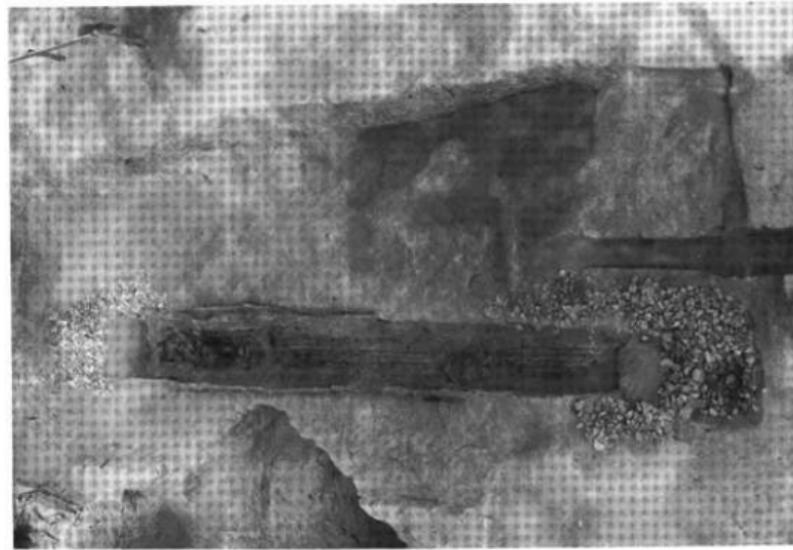
(1) 第1主体部検出状況



(2) 第1主体部玉類出土状況

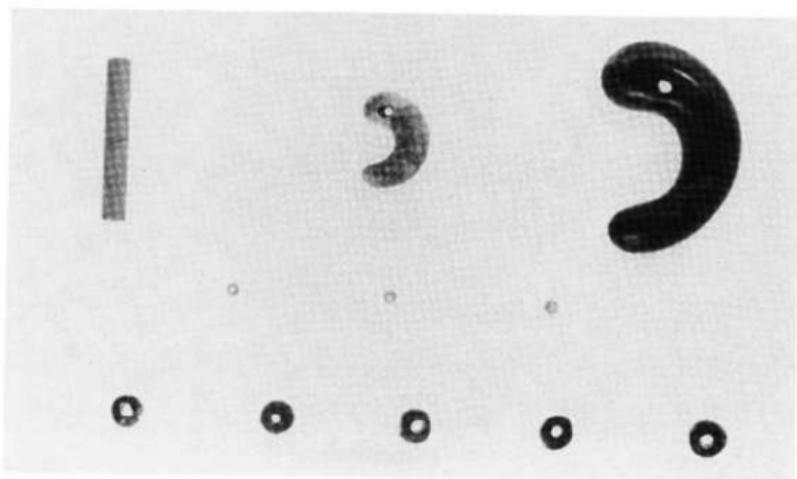
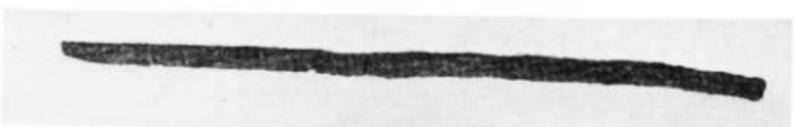
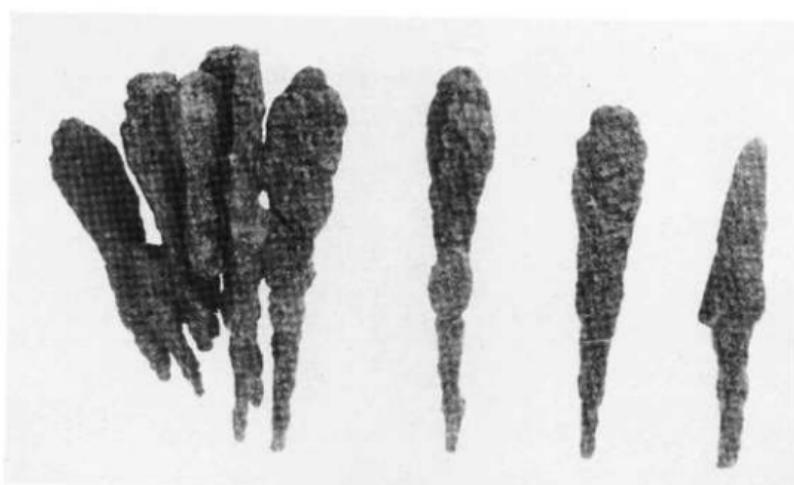


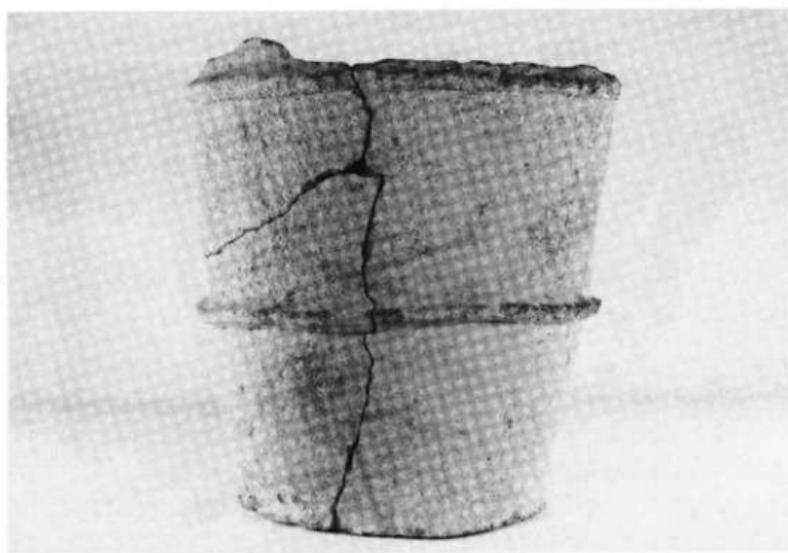
(1) 第2主体部、被覆粘土上面檢出狀況



(2) 第2主体部、遺物配置状況

圖版 6 大塚古墳、出土遺物（鐵器類・玉類）





新免遺跡

I. はじめに

新免遺跡は豊中市玉井町3丁目付近一帯に広がる遺跡で、豊中市史によると遺跡の発見は古く、昭和10年頃に弥生時代後期から江戸時代に至る土器が出土し、複合遺跡であることが確認されている。また前期古墳の遺物が大正初年いまは廃された豊中グランドより発見され、新免上佃古墳と命名されている。このように周知の遺跡として注意していた所、同3丁目で豊中市土地開発公社所有地の試掘調査を昭和56年10月から11月にかけて実施する機会を得た。その結果掘り返えされているものの弥生時代中期の土器を多量に含む包含層と古墳時代後期の柱穴跡を確認し、新たに弥生時代から古墳時代に至る遺跡であることを再認識した。このような経過を踏まえ、今回同3丁目67番地馬場信彦氏所有地で建てかえ新築住宅工事を建築確認で知り、設計事務所と協議を行ない、試掘調査を実施することにした。なお調査は昭和57年7月21日から28日まで行なった。土地所有者馬場氏には快く調査に協力いただいたことに対し、深く感謝いたします。

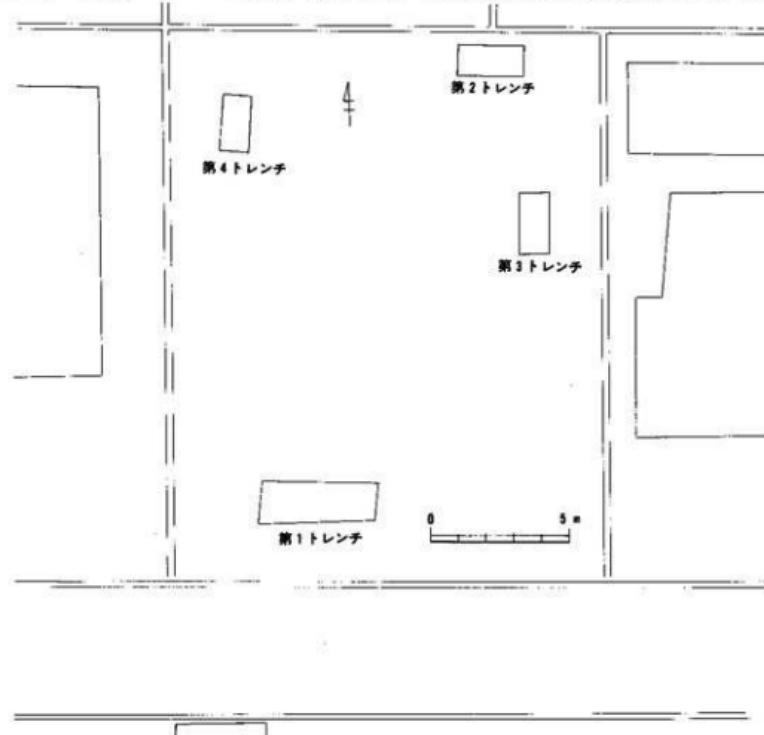


II. 各トレンチの概要

第1トレンチ 調査地の南端に幅1.5m長さ5mのトレンチを設定した。地山まで基本的に6層に大別でき、(第3図)第5層(暗茶黒色粘質土)が弥生時代の包含層であり、第6層上面で遺構を検出した。ピットは直径20cm、深さ45~60cm程の深いものが多い。

遺物は第2層、第3層から土師質土器、須恵器が、第5層上面から須恵器、弥生土器、大型蛤刃石斧片1(第5図-1)が出土し、弥生時代の包含層である第5層からは弥生土器(第4図1~5)、石錐1(第5図-2)が出土している。

第4図1は甕の頸部で外面は縦方向の刷毛調整の後、櫛描き直線文を施す。内面は指ナデ調整である。2は底部で内面は指ナデ調整を行なう。3は甕の底部で外面は縦方向のヘラミガキ、内面と底面は指ナデ調整を行ない、やや上げ底である。4は甕で端部に刻み目を施す。外面に縦方向の粗い刷毛調整を行なった後、口縁部は横ナデ調整を行なう。5も甕で外面は粗い刷毛調整、口縁端面はヘラミガキを行なう。第5図1の大型蛤刃石斧は刃部が破損しており、基端

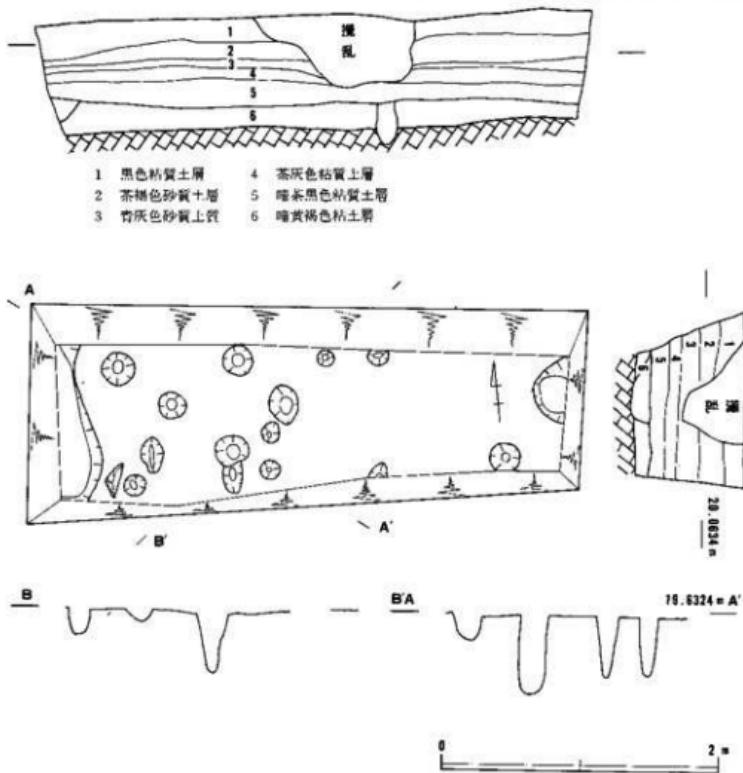


第2図 トレンチ配置図

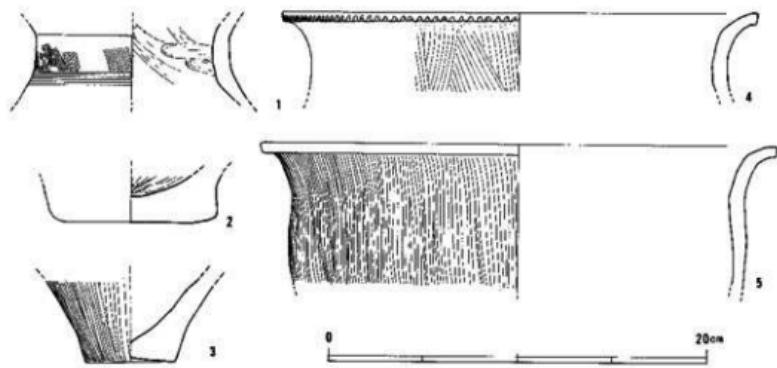
部のみ残存する。基端部には使用による敲打痕が認められ、器面調整は人念に研磨が施されている。2の石鉄は柳葉状タイプのもので緻密なサスカイトを用材とし、両端は破損している。器面調整は両面とも第二次剝離調整によって整形され、転磨の跡跡が認められる。

第2トレンチ 調査地の北端に幅1m、長さ2.5mのトレンチを設定した。第2層から須恵器の杯身片、第4層上面より須恵器、土師器、第4層より須恵器、土師質土器が出土し、第5層上面から若干のピットを検出した。弥生土器がその埋土中から出土したが、湧水が激しく精査しえなかった。

第3トレンチ 調査地の東部に幅1m、長さ2.2mのトレンチを設定した。地山まで基本的には5層に大別でき、第2層（暗黃灰色粘質砂屑）から土師質土器、須恵器が出土し、第3層（茶黒色粘質土屑）から端部に凹線文を施した弥生時代畿内第III様式新段階に属する壺の口縁、矢印状のヘラカキ文様の刻まれた弥生土器片などが出土している。第4層上面から数箇所の落



第3図 第1トレンチ平面図・断面図

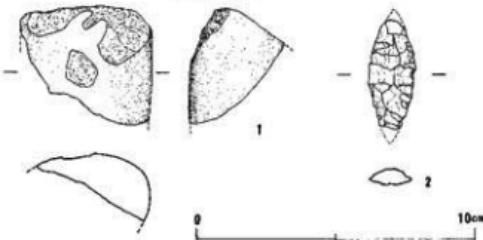


第4図 第1トレンチ出土遺物実測図

ち込みを検出し、弥生土器、須恵器などが出土したが、それらの遺構の性格は不明である。

第4トレンチ 調査地の北西部に幅1m、長さ2mのトレンチを設定した。地山まで基本的には5層に大別できる。第1層は表土で、第2層（茶褐色砂質

土層）から土師質土器、第3層（暗青灰色粘質土層）上面から陶磁器、第3層・第4層（暗灰色砂質土層）から須恵器、土師質土器が出土した。第5層（淡暗灰色砂質土層）上面から五箇所のピットを検出し、その一つからは埋土中より土師質土器を検出したが、遺構の性格・時期などは不明である。



第5図 第1トレンチ出土石器類実測図

III. まとめ

今回の調査は小規模なトレンチ調査であったため、遺跡の性格を明確にしえなかった。しかし、第1、第3トレンチから弥生時代中期の土器片が出土したこと、あるいは第1次調査において多くの弥生時代畿内第III様式の土器が出土したことなどから、弥生時代中期の集落の存在が裏づけられたといえる。

豊中市文化財調査報告第10集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1983年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係

印刷 やまかつ株式会社